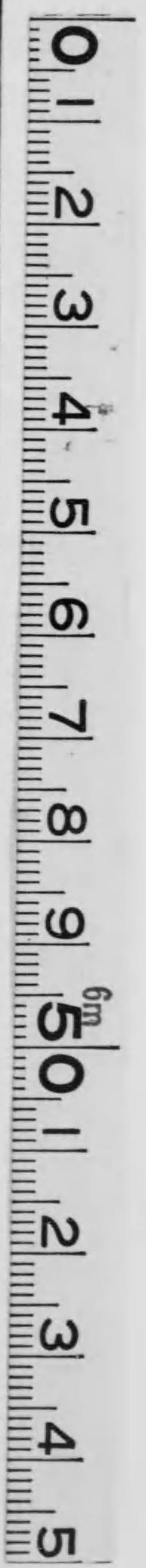


出退
勤の
充實
生活

21

441



始





本館より
勤造の
充實生活

丸野内



大正
5. 6. 26
内交

序

我等の生活は今や一大變革の時期に臨んで居る。月收幾何のみを問題とする生活法は、決して我等が生活の全部を語るものではない。時は遙かに金以上なる現代に在つては、我等の生活は又此の時間的基礎の上に築かれなくてはならぬ。我等が此に其合理的安排と能率的使用とを説き、以て時に起き、時に働き、時に休息する我等日常の生活を充實せしめ、兼れて當代の呪詛語たる「生活難」の解決に當らんとするもの全く之が爲めであつて、我等が一日二十四時間の定

収入を資本として、日給、週給、月給、年給を受くる現代の勤め人に向つて、其の最初の提唱を試みるのは亦この意に外ならないのである。

大正五年六月

著者識

仕而優則學
學而優則仕

— 論語 —

退出より 出勤迄の 充實生活

目次

目次

一 二十四時間の定収入……………一
 生活難——時は金以上——時の諸特質——「腰辨解」——實務式配列——生活と存在と

二 現代勤め人の不安……………二〇
 夢想の過去——幻滅の現在——関か境遇か——將た手腕か——行く川の流れ——根本の不安

三 新生活の出立點……………三九

四 家庭より事務所へ……………五

無目標の當惑——時間表と月賦債券——玉突とスケッチング
——妻君にも語るな——怒は淺く氣は軽く——最初の失敗
日收時間の支出——七時間の處分——出勤前の三十分——現
代勤め人の執務振り——八時間と十六時間——只變化、休息
ではない

五 事務所より家庭へ……………七

疲勞れた六時間——時間割は都合次第——二時間の課程——
心意活動の内容——時間は逆比例——回想に價する過去

六 週間本位の時間割……………九

隔晩に二時間宛——一週には九時間——慣習の變革——自尊
心の擁護——問題の日曜日——最新昇給論

七 往きの電車時間……………一四

電車と勤め人——心力の集注——車内最後の十分——前事務
時間の回顧——感情問題——當日の事務豫定

八 復りの電車時間……………一三

昇進の見込み——書生放れ——收入と將來——對他の態度——
——事務と先天——言行の一致

九 最初の二時間……………一五

讀書には限らぬ——硬いと軟かいと——文藝と科學——眼前
の電燈——新知識の吸收——綠喜のよい出立

十 事務室外の世界……………一七

電車と筭——窓外の天地——因果律——戦亂と船成金——擴
大せる頭と心情——只是れ生の充實

十一 勸め人の社會的地位……………一八八

教育ある階級——生活の程度——中流の下、下流の上——社會の健康——優良なる勤め人——資本家と勞働者

十二 住宅と服装……………二〇五

借家と勤め人——百年も永住の心——其場其時の樂み——ともかくも洋服——月賦制の廢止——生きんが爲めの食事

補録 實行上の要件……………二三四

黙々たる實行——鼻にかける天狗病——豫定案の調節——主客轉倒——不屈不撓——趣味と性向

目 次 終

退出より
出勤迄の
充實生活

丸野内人著

一 二十四時間の定収入

生活難——時は金以上——時の諸特質——「腰辨」解——
實務式配列——生活と存在と

生活難！何といふ癪に障る文字であらう。併し之を意義通りに使つても、又義理一遍に使つても、此文字ほど現代を總括す

入 收 定 の 間 時 四 廿



るに適切なものはあるまい。月並ではあるが、人口の過剰も、物價の騰貴も、就職難も、人心の危くして道心の常に微かすかなるも、悉く此一句に盡きて居るかの感があるでは無いか。電車の軋る音に無感覺な兩耳も、此響にのみは鋭敏である。過度にまで鋭敏である。而して生活難！と眞面目に考へた時の我々の氣分ほど、世に極度の緊張を示すものはあるまい。

或新聞、或雜誌に月收百圓の生活を如何に營むべきかを懸賞問題としたのは、最早過去のことである。今日の問題は月收百圓ではなくて、五十圓、三十圓乃至十五圓の月收生活如何といふことである。更に進んでは——退いては？——一週間何圓、若しくは一日何十錢の生活法如何といふことが、懸賞問題とし

て人氣を沸騰せしめる時機が到來するかも知れないのである。

加之のみならず、「金が敵」と言ひ慣はして來た我々は、金の研究は到れり盡せりである。銀行は一錢以上の預金に應ずる。貯金局は切手代用も不苦くるしからずとする。何十圓を何千圓にする方法をも教へる。而して世を擧げて貯金、利殖、金は萬事、萬事は金と責め立てるのである。夫故、ともすれば欲しいなと工夫を凝らすに無理はなく、一にも金、二にも金と、滔々として拜金の宗徒と化し去るは、現代に住む餘澤？であらう。

月收三十圓の生活法如何？結構なる問題である。金といふ立場から見たならば、寔に無くて叶はぬ必要の研究である。併し三十圓は要するに三十圓である。之を財布に容れても、又ポケ

ツトに入れても、徹頭徹尾三十圓である。精細な支出表を作つて、凡て之を據よりどころとする生活、極めて現代的であらう。けれども是は何う考へて見ても我々の生活といふことの全部ではないのである。人は能く「パンのみにて生きる者にあらず」、といふに對し、直に「パンなくして活くる者にあらず」、と得たり賢しと竹籠返しつべいがへしをするが、パンの研究は如何程完全に出来上つても、其効果の及ぶ所は終に我等が生活の一半に過ぎないことを忘れてはならない。

然るに世間は不可思議である。飽くまでも奇怪である。月收三十圓乃至十五圓の生活法如何といふことを問題としても、一日二十四時間の時間的生活法如何といふことを只の一度も問題

としたことは無い。金を一色ひとしほとする現今の社會から見れば、極めて自然な事かも知れぬ。けれど夫は片手落といふものである。小學校時代から我々は如何なる教訓を與へられたであらうか？時は金なり！教師はよく之を反覆したでは無いか。而して此諺も今日にありては、最早不適當なものとなつて、時は遙かに金以上であるのである。

此の簡單明瞭な事實を、何故に世間の大多數は忘却勝わすれちであるかと尋ねると、時間といふもの、特質を能く領解しないのと、も一つは我劣らじと金の研究にのみ没頭した爲めである。試みに問ふ。今日の月收生活者は、何に依つて百圓といひ五十圓といふ收入を得つゝあるか？言ふ迄もなく通例午前八時より午後

四時迄といふ八時間の勤務時間に對する報酬であつて、若し時間だに許すならば、更に幾何の特別収入をも期待し得られるのである。即時間の所有といふ事が第一の條件であつて、これ有るが爲めに金が得られるのである。別の言葉で表はせば一日二十四時間といふ定収入が有るからである。けれど時を以て金を得ることは出来ても、金を以て時を得ることは出来ない。斷じて不可能である。世には富豪と稱するものがあつて巨萬の富を藏して居る。併し如何ばかり富を積まうとも、之を以て時間の上に加ふることは出来ない。彼等も一日二十四時間。我等も一日二十四時間。一分の増なく、半秒の減なく、共に與に一日二十四時間の定収入者である。

朝になると、「貴方もう七時でございますよ」とか、「ご飯が冷えつちまいますよ」とか言つて、新婚の若しくは舊婚の妻君が我等の睡りを覚ますのが常である。其時眠い眼を擦つて、ウーンと伸びをする両手には何が有るであらうか？打見には只の空拳である。けれど實は出来立ての二十四時間が緊と握り締められて居るのである。之は我々の生活と呼ぶ日々の世界を作る原料であつて、何物にも替え難い貴重な財産である。殊に奇とすべきは、此二十四時間を自己の所有として財布に入れたが最後、之を戀人に贈ることも出来ず、又科學應用の盜兒も奪ひ去ることが出来ず、何としても各自の所有たることである。

衆に先つて憂ふる世の識省先覺は、凝壓機の如く墜ち來る生

活難の重荷を看過することをしない。又さうしては商賣が行立たない。而して資本と労働との調節、利益配當の新案、貧富懸隔の緩和、労働組合の設立、簡易保険の實施等、曰く何、曰く何と幾多の問題を攻究して、經濟上の平衡を説き、財閥打破をすら絶叫する。が翻つて之を時間の圈内に見たならばどうであらうか？此處には分配の不均と稱すること更になく、時間と呼ぶべきものも絶対に存在しない。甲の所有も乙の所有も常に同額であつて、重役なるが故に數時間長く、平社員なるが故に半時間短いといふことなく、老若男女賢不肖、悉く理想的の平等である。

彼女がどうしてもあのダイヤを欲しいといつて承知しない

時、田舎の親戚が突然見物に上京した時、我等はよく月給の前借りをする。けれど時間の前借りを爲し得る會計課は何處の會社にも銀行にも無い。今日は今日、明日は明日、嚴にさうなのである。

明けても暮れても帳簿と算盤といふ乾燥な生活は、たまさかの宴會に法外の愉快を求め、平生の鬱結を散じやうとする。殊に會費が自辨でなく、社費若しくは社長其他の招待である場合は、別段にはめを外し、低給者連を狩り集めて、或はカフェーに給仕女を驚かし、或はタクシーの運轉手を招いて、大に上役に振りを發揮する。そして月末には何の手違ひも無く妻君に叱られる。併し時間のはめは決して外すことは出来ない。一日の

時間を半日に使ふことは出来ず、いつも八時の次ぎに九時であつて、八時九時、一時に打揃つて来ることは無い。飽くまでもチック、タックと一秒毎に供給を受けるのである。

他聞を憚ることではあるが、借家住ひの我等は時とし差配の爲めに店立てを食はせられることが無いでは無い。誠に以て耻かしい次第ではあるが、収入以上の支出を續けた結果であることは言ふ迄もない。濫費浪費、碎いていへば向不見な生活であつたのである。けれど時間の差配には決して此憂はない。今日の一日二十四時間を、静かに無用に使つても、又騒がしく無益に暮しても、店立ては決して食はせられない。瓦斯屋や電燈屋のやうに、供給管を閉ぢたり又斷つたりすることをしない。其

支拂は政府公債の利子程に確實であり、日曜日であるといつて拂渡を拒む銀行や郵便局の眞似はしない。

即ち我々はこの平等分配の時間、前借の出来ない時間、はめの外せぬ時間、店立てを食はせない時間といふ、幾多特色のある時間に向ふに廻はして、二十四時間といふ一日をどの道生活しなければ成らないのである。之を煩さいといひ、又厭はしいといふのは寧ろ愚痴の骨頂である。

月収に頼る我々の生活を表はすに「腰辨」といふ言葉がある。多少古典的であるが、よく言ひ當てた言葉であることは疑ひ無い。殊に妻君あり子供あり、而して主人公が電車の割引時間に急ぐ家庭である時ほど、此言葉の痛切に適用せらるゝことは無

い。而して我々は兎も角も一家の主人公である。家族を養ふこと——具體的にいへば食はせること——は勿論として、第一に健康を顧みない譯には行かない。又百萬二百萬といふ金額は只結算報告に見る數字であるとしても、せめては二期の賞與を袋ごと銀行へ持つて行く程度の財産家には成りたい。そして月に一二度は浪花節の寄席位——帝劇と歌舞伎によく行つた新婚當時が懐かしい——には行きたい。又御用聞きが一旦妻君を奥さまと呼び始めた以上、彼等の尊敬を維持する爲めにも、相應に旦那様たるの態度を崩したく無い。此點からすると月賦調製の洋服にも深長の意氣が加はつて居るのである。その上人間としての意義ある生活をするといふこと、言ひ換へれば社會の一員

として人生の向上進化——腰辨には生意氣な言葉かも知れない——に何等かの貢献をするといふこと、皆この二十四時間から割出さなければならぬのである。故に一日二十四時間の収入を如何に正當に、如何に有効に、又如何に能率的に使用すべきかといふことは、實際我々にはのつびきな問題である。生涯の幸福も、名譽も、利達も皆此一點に歸着するのである。金が萬事、萬事が金でなくて、時が萬事、萬事が時なのである。然るに此貴重の時を、或は拘引せらるゝが如く、或は追跡せらるゝが如く、自ら主となることなくして、愴惶として経過するならばどうであらう？ 平等分配の筈の時間に時閥が起り、供給無盡にして店立てを食はせない筈の時間に、執達吏を差向け

られることが無いであらうか？

即ち日收二十四時間の所得を、適當の支出項目に整理し按排する必要は此處から生ずるのである。是は恰も購買に見積書があり、建設には仕様書があると同様であつて、何事も實務式なる今日の生活には、是非とも無くて叶はぬものである。若し我々の生活に於て全然之を缺くといふならば、其生活は醉生夢死であり、空虚であり、ぐうだらであると言はなければならぬ。時の供給は遅速なき極めて精確なものであると同時に、一分一秒の猶豫なき極めて頑固な、否むしろ残酷な程に冷淡に且つ制限的なものであることを知らないのである。

自分はこゝに生活といふ文字を使つて居る。今後も亦澤山に

使ふ。夫故是はどうしても最初に於て明瞭に領解せられ、判然と區別せらるべきである。

曾て友人に誘はれて、初めて能樂を見聞に行つたことがある。實をいふと能樂に對する自分は、好き嫌ひを言ふ程のものでは無く、極めて無關係であつた。併し無理無體に引張り出されるとなると意地が手傳ふ。頑固に反對して議論を吹きかけても見た。即ち能樂は二十世紀の、而かも新しき現代人たる我々の迷ひ入るべきものでは無い。音樂としては單調であり、舞踊としては原始的である。惰力に縋る過去の藝術に興味ありとする過去の人のみの別天地である。現代に活動する我々は潑瀾たる動的音樂に赴くべきである。と卓拔なる識見を陳べ立てたのであ

つた。尤も是議論は受賣りセコンドハンドであつて、廻覽雜誌のお蔭を蒙つたものである。友人の強制に對し、便宜上自己の姑息を辯護する爲めに借用した迄であり、誰人かの堂々の所論は、卑怯なる自分の犠牲となつた次第なのである。

沈黙の勝利を心得て居る彼は、一言の反駁をも加へず、只自分を連れ出すのみであつた。そして電車に乗るや否や、直に五十回券を閃ひらめかして江戸川行きと二枚切らせて仕舞うといふ、全く手に負へざる暴君の態度であつた。當時の番組の何であつたかはもう忘れて、電燈の前の赤兒のやうにきよろついたこと丈けが今も不快な印象として残つて居る。尤も強えて記憶を呼び起すならば、鼓手の奇聲と、舞の手振りの千遍一律とに中毒し

て、我知らず欠伸をすると、隣席の老人が眼鏡越しにグツと一瞥を呉れた位なものである。

再び訪ねた際の暴君たる友人は、謠本一部を携へて来て、之を稽古するのであるといつて置いて行つた。

然るに此能樂見聞なる事件は、案外な發展を見るに至つた。即ち二回三回と往復し始めた自分は、やがて友人の誘惑なくして出掛けるやうになつた。そして何日いつとはなしに、シテの舞ひ様、ワキの應對、地の調不調が氣に掛るやうになり、時としては鼓のみを區別して耳傾けることも出来るやうになつた。友人は面白いかと尋ねる。面白い、斯くくであると言へると、彼は自分を以て能樂に生き得るやうになつたのであると爲した。

領解の要點は此處に存するのである。先きに電燈の前の赤兒のやうにきよらついた時代の自分は、只能樂の内に存在したのみであつて、エスカレーターに乗つたと同様、自己の意志を動かせ得ない、器械的存在であつたのである。けれど後の自分は全然別物である。囃子と舞と地との綜合の美に共鳴して、隣席の老人を煩さなくなつた時代の自分は、能樂の内に生活し得るやうになつたのである。斷つて置くが此能樂の例は、便宜上借り來つた自分の經驗の一節に過ぎないのであつて、能樂のみが生くるに都合のよいものでないことは勿論である。要は人間の接觸する處、凡て何たるを問はず、意義ある生活を營み行くのにある。

却説此領解を以て、又此區別を以て、一日二十四時間が如何に消費されて居るかを眺めたときに、申譯が無いといふ忸怩の感を抱かない者が果して幾人あらうか？月收幾十圓の生活法が研究されるならば、一日二十四時間の生活法は更に一層の熱心を以て研究せらるべきではあるまいか？如何に安價に生活すべきか？必要であるならば、如何に充實的に生活すべきかは、更に／＼に緊要ではあるまいか？人は能く「も少し閑が出来たならば」といふ。けれど「も少し」と稱すべき閑の出で來ることは決して無く、時は現に有る限りのものであり、油斷も隙も無いのである。

二 現代勤め人の不安

華想の過去——幻滅の現在——閑か境遇か——將た手腕
か——行く川の流れ——根本の不安

茲に現代の勤め人と稱するのは、日中の八時間乃至十時間、又はそれ以上の一定の時間を、事務室其他に執務する男女の階級である。其勤め先が官公署、學校、銀行、會社、工場、店舗たる否とは問ふ所でない。而して自分が今日一日二十四時間を如何に充實的に生活すべきかを問題と爲すのを見て、或者は言ふであらう。

「君のいふ一日二十四時間は今日に始まつたことではない。寢て暮らしても起きて過ごしても、要するに二十四時間である。さう物事をつき詰めて考へるには及ぶまい。あまり醒醒さはりすると壽命の障害さばりになるばかりだ。」

之を聞いた際に、我等現代の勤め人は、如何に感ずるであらうか？

或者は悠揚の態度學ぶべしと爲し、或者は吞氣至極羨むべしと爲すであらう。けれども我等は言葉其儘に悠揚であり、吞氣であると受取る譯には行かない。意識的であること、即ち氣の緩まぬことを特色とする我等は、時間を持って餘した過去の時代の餘韻か、さもなければ人前の附景氣、江戸兒振りの氣焔と見る

のであつて、語る者も聞く者も眞面目に黙頭うなづくことは出来まいと思ふ。

否之に反して我等の大多数は何うであらう？宿昔青雲の志今は残なく霧消し去つて、馱馬の如くに日々の歩あゆみを運ぶのである。志を立て郷關を出てたのに相違はないが、學問が果して成就して居るであらうか？人間到處青山在りの意氣か今猶熾んであらうか？顧みれば現代の教育が、細心と、實際と、打算とを教へて、如何ばかり青年學生の心膽を豆の如く小ならしめやうとしても、青春の希望てふ天與の賜を奪ひ去ることは出来ず、大宰相となり、大學者となり、大發明家となり、大實業家とならうとする所謂「大」の字附きの功名心は、我等の或時期に在つて

は焰々と燃えて居つたのではないか。弊衣破帽を意とせず、深更猶孤燈に親しむを快としたのは之が爲めであつた。語るに稚氣を帯び、行ふに粗雑であつても、眼は常に天の一方を望んで居つたのである。誰か生れ乍らにして或は小使たり、或は重役たり、或は雇員たり、或は大員たるの標符レッヂヤルを額ひたひにして來るものがあらうか？

我等が出勤時間に後れまいと入口の階段を駆け上るとき、微笑を湛え、姿勢を正し、頭を下げる守衛氏にも、試に問はゞ華想に満ちた過去があつたに相違あるまい。否例たがひを遠きに求むる要はない。我等の事務室を一瞥しやうではないか。曾ては某省の某局長ともなつた課長は、僅かに百萬足らずの社費の増減如

何にギョ／＼社長にこづかれて居るではないか。読み上げるK氏の未來の外交家であつた傍ら、弾くS氏は未來の將軍であつたのである。現金を扱ふH氏が未來の宗教家であつたといふのに、傳票の綴込みを専門のO氏は未來の文豪であつたではないか。實に人生の行路は、其最も平凡なるものに於ても、華想の過去を伴はぬはなく、又幻滅の現在に逢着しないものはあるまい。而して、時としては人前の悠揚に氣を抜くことはあつても、此華想の過去と幻滅の現在に對する不滿の感は、常に我等の第二意識を形くるのである。

曾て教科書に十八史略を讀んだことがある。而して陳勝が將相寧ぞ種有らんやと叫んで蹶起したるを見て、竊かに其勇猛心を偉どすると同時に、個人の平等を高唱するの識見を多としたのであつた。我等が今日に見る比較的平等、比較的民主的なる現狀を醸成したのは、社會制度の變革、外來思潮の影響に依ることとは言ふを待たないが、更に一步立入つて考ふるならば、過去の階級制度の障壁が撤廢せらるゝと同時に、個人の自覺が最も新しい意味に於て、自主的に頭を擡げ來つたからであらう。即過去の階級の自滅を急がせ、曾て窺審を許されざりし埒内に闖入して復讐にも似たる痛快の感を抱きつゝ、縦横に荒れ廻つたのは即ち之が爲めであつて、之を我國に見たいけれども、五十年前の過去には夢想だもしなかつた奇蹟である。従つて八兵衛の倅が陸軍の士官となり、庄右衛門の長男が代議士となり、作

を偉どすると同時に、個人の平等を高唱するの識見を多としたのであつた。我等が今日に見る比較的平等、比較的民主的なる現狀を醸成したのは、社會制度の變革、外來思潮の影響に依ることとは言ふを待たないが、更に一步立入つて考ふるならば、過去の階級制度の障壁が撤廢せらるゝと同時に、個人の自覺が最も新しい意味に於て、自主的に頭を擡げ來つたからであらう。即過去の階級の自滅を急がせ、曾て窺審を許されざりし埒内に闖入して復讐にも似たる痛快の感を抱きつゝ、縦横に荒れ廻つたのは即ち之が爲めであつて、之を我國に見たいけれども、五十年前の過去には夢想だもしなかつた奇蹟である。従つて八兵衛の倅が陸軍の士官となり、庄右衛門の長男が代議士となり、作

十郎の養女が、奉公先きからえらい役人の妻女と化す傍ら、御家老様が役場の書記となり、お代官様が學校の小使を拜命するに至つたのを、何人も不思議としないのである。階級といふ人為の風袋を撤去した後の看貫法は、只個人の實力一點張りであつて、正味の多少是れ個人の優劣、爵位や門地や遂に一顧の價値なきものとせらるゝに至つた。

さらば問はん。實力だにあらば、開放せられたる門戸悉く出入することが出来るか？中味だに充分ならば、功名手柄譯もなく我等の掌中に歸するであらうか？早い話が學問と手腕だにあらば、何の遺算もなく地位と報酬とにありつけるだらうか？

否、必ずしもさうは行かない。

成程平民は階級の門扉堅く閉したる前に立つて、此實力を如何と傲然腕を撫でた。そして其階級のみを唯一の障礙となし、之を攻撃し之を破壊し去つて、ホット息を吐いたのであつた。少時は其勝利の歡喜に酔ひ、前途は只平夷とのみ信じたのである。而かも此間第二第三の堅壘の築かるゝを心付なかつたのである。少くとも實力(學問と手腕とをこめて)以外に或物の存在することを忘れて居たのである。

體力の優劣でない限り、學校ほど各自の實力を比較的精確に見當を付けさせるものはない。小學校中學校時代は暫く措くとして、専門學校乃至大學時代に入れば、其成績より推して其將來を豫想することはあながち不可能といふではない。されど一

度此處を辭して、門戸開放、機會均等の筈の社會に飛込んでの後は、果してどうであらう。門戸は到處に開放されて居るであらうか？機會は嚴正に均等であらうか？

之を數年後に徵せよ。すらくと順風に帆を揚ぐるものゝあるのに、同窓の誇りであつたP氏が依然として某省の屬僚であるといふ。尻ビツから二番のY氏が某銀行の頭取の女婿となり、忽にして某會社の重役と成り上る。數回落第の後にやつと卒業したO氏が、世に時めく某子爵の庶子である爲めに某省某局長たるが目に着く。教授學長は言ふに及ばず、同窓の欣仰措く能はざりしA氏が、極南の新版圖の某廳に碌々たるをも傳へられる。野球狂のB氏が、未濟試験中途に海外に渡つたのであつたが、

戰役を機會に一躍成金とのし上がり、紳士録の半頁を塞げて居る。之を呼んで閨閥、門閥、財閥となし、又は不測の好機となすは問ふ所でないが、其實力を以てしては到底期待し得ざる正味以上の地位と報酬とを享受するのと、同高同低の机と椅子に鉛筆を削つた昔日の學生が、年もすぎの戸を開けて出てからの幾年後には、其社會上の地位に格段の高下を生ずるのは、我等が現實に見る出來事ではないか。而かも運命の惡戯は是を以て足れりとせず、或はブラットホームに於て、或は公會宴會の席に於て、或は旅館に於て温泉宿に於て、又は陸を離れた甲板上に於て、逃げやうも隠れやうもなく彼の得意と此の失意、彼の揚々と此の凡々、彼の成金と此の腰辨とをハタと再會せしめる

ことがある。強者の哄笑、弱者の苦笑、悲劇か喜劇か我之を知らず、只人間の存する限り隨時隨處に演せらるゝ一場の光景である。而して一會社が社員の全體を重役となすを得ざる限り、一省を擧げて大臣たるを許さざる限り、我等の大多數は遂に弱者の苦笑連たらざるを得ざるは是非も無い次第である。

夫にしても我等は食ひ、住ひ、且つ着なければならぬ。又食はせ、住まはせ、着せなければならぬ。月収百圓たると五十圓たるとは問ふ所でない。長官なるが故に坊ちやん嬢ちやんには土用にも布子を着せるべく、屬僚なるが故に倅や娘には寒中も單衣ひとへを被せるべしといふ掟おきても無い。少くとも社會の一員、乃至家庭の主長である以上、或は文律不文律の制裁によつて、自己

は申すに及ばず、家族の健康を維持し、快適なる生活を送らしめ、借金あらば返済すべく、無ければ之を貯金すべき義務があるのである。寔に容易ならぬ負擔である。

而かも光陰は相變らず矢の如くである。學校を出たのはつひ昨日と思つて居るのに、見るともなしに鏡に向へば、鼻下の髭にも五六本の白髪が交つて来る。長男はもう來年からは小學校である。見合當時の寫眞を、どこのお嬢さんかと見る程に妻君も老おけて來た。在學當時のノートの塵の儘に積んであるのは、屑屋にやるも流石に惜まれるからであつて、其一頁ひらきだも披ひらげはしない。セセッション式の書架は裝飾品の一つとはなつて居つても、扉ひらきを開けることは滅多に無く、横文字の背革徒らに金色燦

爛として、徹霄讀破したりし其折の記憶を呼び覺ますかにも見える。一日八時間といふ一定の時間を勤め上げるのみが我等の全部ではない。何か爲さなくてはならぬ。来る日も来る日も、去つた日の如く放ちやるのは申譯が無い次第である。歸つたとき、寢たとき、起きたとき「是ではならぬ」と考へたのも最早數へ切れぬ程である。明晩からと言つた。來週からと誓つた。來月からこそはと力み返つても見た。

けれども夫は無効であつた。徒らに妻君に對して信用を墜すのみでなく、第一に自己の自尊心を傷ける基であつた。夫にも拘はらず、

「日月逝矣、歲不我延、嗚呼老矣、是誰之愆」

の感は切々と胸に食ひ入つてくる。中學時代國文の教科書にあつた爲に、美文趣味から暗誦までしたことがある鴨長明が「方丈記」の

「行く川のながれは、絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつきえかつ結びて、久しくとゞまる事なし。世の中にある、人とすみかと、又かくのごとし……」

を、今や事新しげに改めて考へさせられるのである。

かくの如く勤め人としての我等は、第一に華想の過去と幻滅の現在、即ち思つたと見たとの矛盾感に附纏はれる。併し是は船足をつくる下積みのやうなものであつて、常に心の奥に横は

る流である。時あつて波を揚ぐことはあつても、夫は過去の追憶に伴ふものであつて、大方は斯うしたものと潔く思ひ馴らして仕まうのである。

第二に起る弱者の苦笑感は、前者と比べては稍々趣きが異つて来る。といふのは成功と失敗との比較が、あまりに靦面であり、得意と失意との對照があまりに残酷であるからである。併し人間としての我等は、頗る身勝手な動物であつて、極めて便利に出来て居るのである。己れ得意の境に入れば、世に時めく某子爵の庶子であつたこと、戦役が勃發して思はぬ軍需品の賣込みがあつたこと、ウンと積んだ岳父の富がいつも背景になつたこと、言ひ換えれば境遇と、機會と、財閥との後援を悉く否

定して、この腕がこの頭がと、己れ獨りの實力のみに其功を歸してしまふ。之に反して己れ失意の境に沈めば、頭の鈍いこと、腕のハロクサなことを棚に上げて、機會や、境遇や、其他ありとある一切の事情を數へ擧げ、厚がましくも其罪を塗^{なす}り附けてしまひ、「あの時さへこうであつたならば」とか、又は「この時さへこうであつたならば」と、死兒の齡を數へつゝ、哀れな呻^{うめ}吟^{うた}き聲を上げるのである。

けれど第三の不安感に至つては、全く性質が別である。「こうしては居られない」と云ひ、又「何かしなくてはならない」といふ不満感は、影の形に従ふが如く、我等の日夕を離れることをしない。堂々の邸宅に住まつてもさうである。棟割長屋に燻^{くすぶ}

つてもさうである。年齢の多少又關する所でない。偶々の日曜日を幸ひに大森か玉川に遊びに行く、電車の來るを待つ間心付いて見ると、

「青年は老い易い、再び來るものではない。」

と例の不安感が叫くのである。芝居に行く、幕間がある。すると忽ちに現はれ來つて、

「遊んでもよいのか？ 屹度さうか？」

と叱るやうに勵ますのである。事務を執る、手隙きが起る。何となく眼を落せば、

「急げよ！ 斷行せよ！」

と煩悶もたへに惱むハムレットを諭すやうにさし招くのである。され

ばこの不安は一旦眼を内側に向けたが最後、むら／＼と起りたつ自らの叫びである。一事を成就すれば又直ちに他を思はしめる願ひである。思ひ馴らすことも出來ず、又身勝手な辯解を以て胡魔化す譯にも行かない。胸の、心の奥底より湧き出づる憧憬、向上の奮起であつて、常に現狀不滿を標語となすものである。試みに敗殘の落伍者を捕へ來つて其眞面目しんめんめくを吐露せしめよ。彼や如何ばかり郷黨の嗤笑を買ひ、如何ばかり親近の失望を招かうとも、

「縱横計不^{ならざれども}就、慷慨志猶存」

の意氣を嚴として把持するであらう。

繰くどくは言ふまい。此不安感を何と見る。是實に天地の間に生

を亨けたる以來、我等が營み來つたる人生と稱するものゝ一部であつて、又日々の生活の根本動力である。人文の開發、物質の進歩皆この賜である。而して若しもこの却火の滅することがあるならば、個人にしては其存在の意義を失ひ、社會としては落日の衰運を辿るのみである。

我等がこゝに營まうとする二十四時間の充實生活は、この根本の要求に基き、且つ之を満足せしむるものでなくてはならぬ。

三 新生活の出立點

無目標の當惑——時間表と月賦債券——玉突とスケーチ
 ング——妻君にも語るな——怒は淺く氣は軽く——最初の失敗

上述の如く、我等の多數は定時間の勤務以外に、何事かを仕遂げやうといふ願望を有して居る。夫にも拘はらず、此願望を満たすだけの何事をも成就し得ない爲めに、我等日々の生活は、何かしら仕残しがあるといふ不満足の連続であるいふことゝ、一方に於て此不満足に對する頓服劑として、うも少し閑が出来たならば」と一時逃れをいつて見ても、時間はそこにある限りの

ものであつて、昨日の時間を今日に延べることも出来ず、又今日の時間を明日に繰越すことの出来ないものであるといふことは、我等一日二十四時間の定収入に對して、どうしても完全な支出案を作成して、五月蠅い失望の境界を脱しなければならぬ機目に立到らせるのである。

けれど愈々之に取掛る前に一つ考へなければならぬことが有る。夫は先きにいつた不安感が、人生としての根本の要求に根ざすことは明瞭であるが、夫ならば此要求を何物に差向けて行かうか？自己の生活に緊密に關係するものであると同時に、又日々の生活を快適ならしむる或物は何であらうか？抑へ難き欲求を満足せしむる爲めに、差當り何に目星を打たうか？是が先

決問題である。之に關しては、自分は自己の一經驗を——固よりお粗末なものではあるが——試に提供して見たいと思ふ。

夫は今より二年程前であつた。恰も胃腸の衰弱時に食欲が更に無いと同じ様に、自分は何物にも感心出来なくなつた。裏からいへば感心の出来るものを見失つた譯である。芝居、活動、圍碁、謠曲、玉突といふが如き娛樂はあつても、此等は一時を紛らす方便とはなるが、其處に自分が無條件に感心するある物を發見する見込はない。讀書冥想、試みては見たが一向に埒は明かない。發動機に故障を生じた飛行機のやうに、其儘に行けば只墜落の外無く、全く當惑し切つたのであつた。

事務所へ行く、無論事務を執る。四時になる、無論家に歸る。

けれども出入共に些かの活氣が無い。只引きづられて行く惰力の生活である。「此では仕様が無い」、「此では危険だ」と思ひ直ほしても、自ら赴く渴望の対象がなく、又驅り立つる恫怛しやうきやうの目標が見付からぬのである。當惑といふ文字は平生は頗るぞんざいに使用され、借金の返済に困つた時位に思つて居るが、自分が此際の當惑は最も高尚な意味に於て、極度にまで之を働かしたものであつた。而かも當時自分は月收五十圓を得、夫れに二期の賞與を豫算に入れることの出来る會社員であつて、決して食ふに困るのではない。妻子にも餓えず凍えざる程度の供給は出来たのである。

斷つて置くが、此當惑を「酒でも呑めば癒なほる」と職人連の氣

鬱症と同一視されては困る。又「房州の海岸へでも轉地しろよ」と、若き學生の煩悶と見られてもならない。現代の學問に養はれた三十五歳の中年者であつて見れば、世の中を少しも知らぬではなく、經驗も強ちに貧弱ではないのである。只是はと思ふ或物を拾ひ上げて見ても、更に氣の進まぬのが當惑の常態である。むしろ過知過感を特色とする當世に生れたる一人として、事物を観るのである。そして直ちに評價をする。公理にあてはめる。百の議論を只一個の事實を以て轉覆させる底の見方をする。見くびるのではないが、高を括くくつて仕まう。政治も、宗教も、道德も、金儲けの實業も皆この筆法で眺める。熱の出やうもなく、興の湧きやうもない。只じめくくと當惑するのであつ

た。

「然らば現在はどうか？」

此問に對しては次の如く答へる外はない。

「充實生活といふ心掛けが、否應なしに當惑を吸収し盡した。」

却說我等は、何にまれ謂ふ所の或物を發見したとして、之に依つて充實生活を營む二十四時間の支出案を、今や作成すべき段取りとなつたのである。

科學萬能の現代は、何事の目論見をするのにも、直ちに計算といふ。そして或者は表を編み、ダイアグラム 圖表を作り、プロトタイプ 青寫眞を焼き、以て萬事決すべしとして居る。又實際斯くして決せらるゝことが少くはなく、寧ろ大部分はさうなのである。さらばこゝにい

ふ我等が日收生活の完全な充實法は、均しく計算の武器に依つて出来るのであらうか？何か手つ取り早い秘訣はあるまいか？又最も樂な捷徑ちかみちがあるまいか？

無い。斷じて有りはしない。又我等は之を探り出さうともしない。のみならず之を發見し得るものがあるとも思はないのである。

すると氣早の少壯勤め人は、唯一の武器たる圓定規を揮つて、赤い線と青い線とを、會社の用紙に縦横に引廻はし、何時より何時迄の配當表を作成し、之を以て明日より、否今晚より眞の生活に出立するのであると爲すかも知れない。併し我等が茲に考へやうとする充實生活を、斯の如き方法に據らうとするなら

ば、我等は當人に向つて、誠に木で鼻をくゝる申分ではあるが、「そんなことならお止しなさい。」と言ひたい。

又勸業債券の月賦購入に慣れた我等の或者は、金拾圓に、ブルミアム金參拾五錢也を以てし、金貳千圓也を抽き當てやうとすると同じ希望を抱き、此充實生活により俄分限式の大効果を收めやうとし、抽籤外れの通知に接したる際、自棄に帳簿をたゝき附けたり、又は給仕に當り散らす程の失望と落膽とを覺悟しないならば、我等は又當人に向つて、無愛嬌ではあるが、「そんなことならお止しなさい。是迄通りごろ／＼して居らつしやい。」

と申渡したい。

只一日二十四時間内の支出案の範圍内に於て、充實生活を營まうとするに當り、第一に我等の深思すべき要件は、此事は決して容易なことではなく、むしろ非常の努力を要する難行であるといふことである。之を明瞭に承認し、従つて其覺悟さへつくならば、常に何事をか爲さんとして、常に其爲さるるに苦しむ我等は、促されずとも自ら緊揮して立たなくてはならない。而して或者は

「お談議はもう宜いよ。判つてるよ。一體どうして始めればよいのだ。」

と尋ね兼ねまい。之に對しては只次の答へあるのみである。

「只始めさへすれば宜いのです。」

我等の或階級には、我國在來の娛樂たる圍碁、將碁を以て非文明的であるとし、大に玉突を持上げるものがある。又球戯場に入入することを以て、當世の紳士たるに無くて叶はぬ一資格であると決めて居る。そして一ゲームに一時間餘りを費さうとも、又一キューに二百三百と出さうとも、彼等の玉突にも亦始めはあつたに相違ない。其際彼等は「どうはじめるのか？」とゲーム取りの女に尋ねる程の不見識は、紳士の手前しなかつたであらう。若し誤つて尋ねたのであつたならば、

「お突きになればよいのです。」
と宣告されたであらう。

然り玉突きならば突きさへすれば宜いのである。スケーチングならば、鐵の草鞋を穿いて滑りさへすればよいのである。外れやうと轉ばうと夫は問ふ所でない。先以て突き、且つ滑るべきである。幾度外れやうとも、幾度轉ばうとも、夫は下手な相撲のやうに化粧立ちに時を空費して居るのでは無く、少くも或事に着手したのである。而して得たる此新經驗、そこに測り知るべからざる價值が存するのである。

併し我等は共に充實生活に入らうとする多數の勤め人を、球戯場の女のやうに、さう劍突がましい事を言ひたくない。同僚の誼みである。次の三件を注意事項と勧めたい。

第一 妻君にも語るな。

自ら撰んで試みやうとする事柄を、誰人にも告げないことである。夫婦の間柄、妻君丈けには差支えないではないかと歎願する者があるかも知れぬ。けれども夫は以ての外である。何故なれば第一妻君に關係の無いことである。又他人を煩はすに及ばざる事である。自分自身に碍の明くことである。否斯ういつた性質のものでなくてはならないのである。又別方面から眺めるならば、自分と同様に、妻君には妻君、他人には他人の充實問題があるかも知れない。何か重たいものを持ち上げやうといふ臨時の場合でない限り、滅多に人手を借るべきではない。且つ之を心意の作用から見るならば、何等の着手を爲さざる以前に、之を他に洩らすといふことは、或意味からすれば既に失敗

を豫想して居るともいへる。何となれば、如何なる些細な事件であらうとも、或一事を計劃するが爲めには、其人の知識、經驗の限りを盡し、之に相應の意力を加へて、牝鷄の雛を孵へすやうにじつとして居るべきである。彼を遣らう、此を仕やうと饒舌つては、口を切つた麥酒のやうに氣が抜けてしまひ、共に實行の氣勢を殺ぐことが決して珍らしくないのである。只自ら深く秘して、今晚からとも明晩からとも公表せず、極めて自然に發足すべきである。啻に三日坊主と宿の妻に嘲けらるゝを豫防するが爲めのみでは無いのである。

第二 慾を浅く氣を軽く

何事にまれあまりに烈しく意氣込むのは危険である。今日若

しくは明日中に仕上げやうと取掛らないことである。決して泰山を鳴動せしめないことである。勿論或る事柄を爲し始めるのであるから、相應の熱心がなくてはならぬ。又其人相應の元氣も必要である。けれども遠足に出掛ける前夜の學校生徒のやうに、碌々寢すにはしやぎ通し、朝餐もそこ〜に飛び出し、さて半途はんちゆうも行くか行かぬに勢を疲からし、教師の厄介になるのと同じ様では困る。一匹でも鼠が出ればまだ優ましであつて、殊によつては何も出ないばかりでなく、再來の意氣を併せ失ふことがあるかも知れぬ。兒童こどもならばともかく、自ら堂々となす官吏なり會社員なりが其態度では却つて不堂々である。又之と均しく一時に多きを貪つては不爲めである。此書物を二晩に讀破

しやうとか、あの事項を一週間内に研究し盡さうとするのは、前の意氣込みの素晴らしいのと同じ結果になる恐れがある。「石に立つ矢のためし」誠に結構ではあるが、一度や二度を以て完結することではなく、人生五十、六十、乃至古來稀なる七十歳迄も生くとすれば、一旦之と見極みきはめを附けた以上、徐ろに運んで行つて決して差支はない。石に矢を立つる必要は毛頭なく、精神一到何事か成らざらんといふ際の其精神を、じつと内に潜めて、妄に冷却し放散せしめないことである。即其着手の始めに當つては、極めて少量に出立し、且つ之に向つて起り來る種々の故障を考へ、又人間の弱點、殊に自己の弱點をよく計算して之を差し引き、而かも猶優に實行し得るやうに立案する

ことが肝要である。

第三 最初の失敗

最初の失敗は非常の細心と注意を以て回避しなければならぬ。尤も世に成功と稱するもの、必ずしも成功でないと同じく、失敗と呼ばれるもの、必ずしも失敗に終はらないのであるから、絶対に失敗なきを期せよといふのではないが、茲に我等の憂ひとするのは、此失敗の経験と共に、自己の自尊心又は自信力を併せ失ふ危険があるからである。卑近の例をとつていふならば、碁は策である。將碁は飛車ばかり可愛がる。謠曲は鵝鳥の風邪ひきである。玉突きは鴨と敬稱されて居るといふのは、あまり果敢ない次第である。何をやつても駄目であるとい

つて、我れと我身に愛想をつかす程恐ろしいものはない。夫故一日二十四時間といふ多くもない時間内に、充實生活を送らうといふ大事業にとりかゝるのには、何物を犠牲としても最初の失敗を避けなければならぬのである。世には一二度は差支ないとか、又は大功は細瑾を顧みずとか、或は偉大なる失敗はケチな成功に勝る萬々なりと放言して、所謂偉大なる失敗者の肩を持つものがあるが、餘事はさて置き、我等が茲に説かんとする充實生活にあつては、大功を収めるに先立つて細瑾を厳に豫防しなくてはならない。偉大なる失敗よりもケチな成功を尊重しなくてはならない。何となれば偉大なる失敗からは、一時の豪快趣味は得られやうが、失敗の外何物をも齎らさない。之

に反してケチな成功からはやがてケチならざる成功を期待し得るからである。

曾て友人から得た書狀に次の一節がある。本章の爲めの報道かの感がある。

「……過日は不圖門前を過ぎり候まゝ、相訪ね候處幸に在宅、久々にてU氏に面會仕り候。不相變米國行きを唱へ居り申候。御承知の通り同氏の渡米談は、當地御在任中よりの吹聴にて、明日にも出發致すかの如く承り候ものなれども、未だ其運びに至らず、却つて後より參り候者が歸朝致し候様の次第に候。試みに着米後の計劃等相尋ね候處一向に要領を得ず、剩さへ何會社の何汽船により、船賃は幾何かも

存せざる模様候。殊に同氏留守後の家事向如何に關しては、何等の具體的考案なく、只十年一日の如く渡米を談ずるやに見受け候。

四 家庭より事務所へ

日收時間の支出——七時間の處分——出勤前の三十分——
現代勤め人の執務振り——八時間と十六時間——只變化、休息ではない

我等は、こゝに愈々問題の日收時間の支出案を、實際に研究することゝなつたのである。

「僕等の時間割はもう満員だ。此上餘計なことなんか割込める譯のものぢや無い。」

或者は取敢へず斯ういふかも知れない。可矣、夫ならばもう割込む餘地が無いといふ時間割其物を暫時拜見するとしやうでは

ないか。

勿論東京の勤め人として見やう。通例午前八時乃至九時に出勤し、午後四時乃至五時に退出する。是は月收幾十圓かを得る日々の勤務時間であつて、衣食住といふ意味の生活を維持する爲めの八時間である。

然らば日中の勤務に對する夜分の休息、即ち睡眠時間には幾何を費すだらうか？現代人である以上眞逆「子（夜分の十二時）に臥し寅（午前四時）に起き」といふやうに、僅々四時間に満足した過去の未開人の眞似は出来まい。又大奈翁程の豪傑でないかぎり、たつた二時間では濟まされまい。少くとも午後十時乃至十一時から、午前五時乃至六時の七時間は、最も掛直のない

所であらう。併し時としては赤坊が泣く、犬が吠える、寢附かれぬことが無いとも限らぬ。こゝは一つ寛大に見て、一時間の餘裕を與へ、床の中に居る時間を八時間と決めて置かう。

仍て残り七時間の處分はどうなつて居るか、如何なる勘定科目に配分せられ、其査定法は寛か嚴か、之が差詰め大問題となつて来る。

我等は今この監査に當つて、斷つて置くべきことは、或る一部の人々の金科玉條とする統計表を所持しないといふことである。又有つても使はうとはしない。何となれば統計の目的とする處は常に平均といふことを狙ふ。平均した勤め人、そんなものが世に存在しやうか。我等は飽くまでも或る個人の事例を取

つて、之を代表と見るのみである。

さて前にいつた東京——便宜上——の勤め人は、官廳であらうと、銀行會社であらうと、兎に角一定の時間を事務室内に勤務する。茲には之を午前八時から午後四時迄として置かう。而して家の門から——門が無ければ格子戸から——事務所の入口までに、又は其逆に朝と晩とで五十分宛を消費するとしやう。無論電車時間である。併し職務に依り、又は他の事情に依り或は八時間以上、或は八時間以下の勤務に服し、又市外より市内へ、市内より市外へ通勤するのに、或は一時間以上を費し、又は半時間前後を以て充分である場合のあることは言足す迄も無い。又ある特殊の例をとつて見ると、知人のH氏の如きは市内

の牛込から郡部の某驛附近に通勤する。朝は通常五時半に床を離れる。化粧と食事と着衣とに追立てられるやうにして一時間はかゝる。品川の停車場迄市内電車に約一時間、品川から某驛へ院線電車にて二十五分、停車場から事務所まで五分、八時の出勤時間にカツ／＼に漕ぎ附ける。夕方は五時過ぎに退ける。一時間半を又もや電車に揺られて歸つて来る。着更へて湯に行つて食事を終つて、やれ／＼一吹となるともう八時半頃になる。新聞でも見ると直ぐに九時半位になつてしまふ。斯うなると眠むくもあれば明日のことも氣に懸る。寝ない譯には行かない。つまり家庭にあつて眼を開いて居る時間、即ち意のまゝに使へる時間はギリ／＼一時間半位なものである。どんな氣持かと訊くと、

「殆んど生きて居る氣がしない。」

といふ。何故郡部へ引越さないかと續けると、

「夫でも東京の方は好い。」

と、都會人であることを、さも誇りがに言つて居つた。勿論之はあまり飛離れた例であつて、「生きて居る氣のしない」勤め人は何といつても茲に我等の代表者たる譯には行かない。もし眼を開いて居られなくては手の着けやうがないのである。

出勤前の我等は比較的に時間を空費することをしない。率直にいへばしゃうにも出来ないのである。「もう幾時でございませぬ」の第一の警告から、「何もかも冷たくなるぢやありません

か」の談判に跳ね起きる迄には、割引電車を敵の如く追ひ廻はすのにも、「辨當臭い電車に乗るんぢや無いよ」と大に紳士がるのにも、又宿俵連にも、自働車連にも幾多の段階がある。けれども我等の多数は要するに時間間際の飛起き連であつて、新婦を迎へる新郎のやうに萬端の用意を整へ、出勤時間ご參なればかりに待構へて居るものはありはしない。起きて顔を剃つて——もみ上げに念を入れて——、新聞（或者は床の中にて）を見て、庭を掃くとするれば最も心懸けの好い方である。も少し度胸がいいのになると、出勤時間迄を、もう十分、もう七分、もう五分と、刻みながら寝て居るのがある。さて愈々となつて飛び起る、顔を洗ふ、飯を掻き込む——食ふとはいはれない——ソ

ラ洋服だ、ソラ帽子だ、靴だと家内中を騒がせ、時にはネクタイ無しの出勤もある。宛然颱風來の慘景である。

我等は此颱風來を以て、一年三百幾十餘日悉くさうと斷ずるので無いことは勿論であるが、追立てられるやうに停留場にかけるのは決して少くはないのである。又我等の説かんとする充實生活は、出勤前の朝の時間に何等課業を割當てやうとはしない。よしや割當てたにしても、亡命の客の如きに何の効力もない。只一事の希望がある。曰くいつもより三十分早く起きることである。是は床を離れることから電車に乗るまでに使用するべきものである。剃刀を以て顔に手疵を負はない爲めに、食物をよく消化せしめる爲めに、飛乗つて怪我をしない爲めに、

出勤簿を奪ひ合はぬ爲めに。

古人言はく、一日の計は朝にあり。決して忽にはならないのである。

我等は事の序に華想と幻滅の矛盾より生ずる不満、並に弱者の苦笑といふ不快感を道伴れとする所謂現代の勤め人が、斯くの如くして事務室に入り、デスクに向つて腰を卸し、さて愈々事務に掛らうとする時に、如何なる態度を以てするかを見て置きたいと思ふ。

腹藏なくいへば我等の執務振りは、勿論例外はあるが、大體に於て決して譽めたものではない。月給を拂ふ方から言つたならば、たゞで貰つて居るものだといふかも知れない。第一に事務

其物に對する熱が薄い——是には種々の理由がある。今日の人頭の出来具合からすれば、餘儀ないことだと思ふ充分の理由がある——成る丈け遅く出勤して厭々ながらペンを取り、算盤をはじくのである。決して全馬力を出さない。其證據には局長なり課長なりが病氣缺勤又は地方行きとなると、めい／＼の出勤時間が必ず不同になる。控目にいつても何時も通りの精勤では無い。若し出勤簿といふものがなく、夫が又半期の賞與に關係するといふことがなく、給仕が之を集め廻はるといふことが無いならば、八時は九時、九時は十時にノコ／＼と遣つて來て、「一寸用事があつて」杯と言譯をするのは、強ちに見られない例ではない。上役が居れば徒ら書きであつても、下を向いて忙し

げにペンを走らせて居る。而も其ペンと云ひ、インキといひ、紙といひ、何等の利益を齎らさないざれ書きの爲めに、其會社其銀行の缺損を醸しつゝあるのだ。而して一旦上役が室を出たとなると、直ぐに取つて返すのも知らずに、ペンは文字を書きかけた儘に横はる。算盤はよせ切らずに静まりかへる。ウアーツと聲を立て、欠伸をする者なども出来る。向ふ三軒兩隣り椅子を捻ぢ曲げて時間の虐殺を始める。夫が午後であれば、必ず阿彌陀をおつ始しめる。

更に退出間際の光景はどうであらう。廿分も前から机の上が片附けられる。ペンを洗ふ、認印を拭ふ、アルミのお辨當箱がそろ／＼匂ひ出して来る。誰も顔が莞爾ついて来る。四時と

いふが早いか凱旋者の如く、放たれたる勤め人が飛び出すのである。出勤が遅いからせめて退出を早くする底の洒落は古い。之を誇張としてはいけない。虚も隠しも無い事實である。我等とても此一人でないとは申し兼ねるのである。

すると之に對し、
「それは偏頗な觀察である。今時の勤務者、殊に進歩した勤め人クラッシュにそんなものがあるか。若し其通りだとすると、まるで横着の權化のやうなものだ。皆せつせと働いて居るではないか。」

と来るかも知れない。一應尤もな抗議である。又かういふ勤め人のみであるならば誠に結構である。只我等は一般勤め人の心

裡を、勤め人として讀んだのである。そして數ある同僚の内から、早出遅退、我事のやうに其社の利益を計るものがあるといふことは、むしろ我等の誇りである。是はどうしても何年勤績表彰會の主人公であるに相違ない。

同じ事務室勤務者であり乍ら、一つ異つた階級がこゝにある。これは自己經營者の日々の出勤と退出である。十分時の餘分の勤務は、直ちに當人のポケットに影響するといふのである。極端にいへばむしろ夜分が無くてもよいと言ふかも知れない。従つて其執務振りに熱もあり活氣もあらう。けれども中には同じ自己經營者であり乍ら、事務室勤務といふ生活を、只利益一點張りにのみ眺めるものでないことを見逃してはならない。

日二十四時間より事務用として切放したる八時間を、「此が勤めだ」「此が義務だ」と特別扱ひをしないだらうか？ 役目となれば、いくら慾が手傳つても、一杯呑みに行くやうな氣分になるものではない。

而して斯の如き態度を以て、事務時間を送迎する我等の多數は、一日二十四時間の内事務室用八時間、即午前八時より午後四時迄を何と見て居るかを知らず、又興味ある一問題である。

第一に我等は其八時間を一日中の一見做して居る。前の八時間と後の八時間とを、芝居ならば三番叟と大切りのやうに考へて居る。少くとも中味の八時間の爲めに存在する前衛後衛と心得て居る。役目の時間さへ勤め上げれば後はどうでもよい

として居る。併しこの態度は好んでさうするのでは無いかも知らぬが、残りの十六時を極めて乾燥なものとしてしまふではあるまいか。空費しない迄も、計算には入れない餘計なものとするのである。のみならず日毎の勤務時間といふものを特に重要視し、活動は是にのみすべきであるとする、世に謂ふ受負仕事之感が生じて来る。唯之れさへ成就すれば構ふことは無いとなる。即二十四時間の三分の一たる八時間の爲めに、他の三分の二の十六時間を犠牲にし、之を従屬的に取扱ふといふことは平衡を失した考へではあるまいか。

併し斯ういふ意味は、一日の三分の二の爲めに三分の一を好加減にしろといふのでは更には無い。唯之が爲めにのみして他の

三分の二に何等の意義を持たしめないのはよくないといふのである。若しさうでなくて前の意味に曲解されると、唯でさへ屠所の羊の如くして事務室に入り、油を賣つて而して脱兎の如く退出する連中は、此は願つたり叶つたりなことであるとして、大に其本領を發揮するかも知れぬ。途方もない事である。充實生活は決して他を犠牲として成立するものではなく、事務用八時間を寧ろより有効ならしめ、より能率的ならしむるものといふ假定の上に出立して居るのである。

併し大に成績を擧げて、社長重役の恩賞に預からうとする上役連になると、この道理をよく呑み込めないで

「是は以ての外である。貴重なる勤務時間以外に、其屬僚、

其社員が餘分のことをしては困る。勤務時間の妨げになる。人間の勢力はさう續くものではない。」

と例に依つて異論を挟むかも知れぬ。廣い意味の労働者の汗に儲けやうとする資本家は、或はさう言ひたいかも知れぬ。併しそれは誤解である。一も知らなければ二も知らぬのである。十六時間の充實生活は勤務時間の勢力を削ぐ處ではなく、反つて其價値を増すのである。算盤萬能を信するそれ等の人々は、二と二とは四である。而して前者を増加する爲めには、後者を二とし零とすることも辭さないが、後者の爲めに前者に手を着けられては引合はぬと考へて居るのである。唯夫れ丈けである。而して我等の頭的作用は數の計算とは大に趣きを異にして居る

ことに氣が附かないのである。

我等の脳髓はよく働く。根氣よく働く。そして心意の能力は活動といふことを決して嫌ひはしないのである。疲勞したといつても、手や足のやうにぐにやりとなる質のものではない。唯いくらでも働くには働くが、時々の変化が欲しいのである。是は我等が學生時代に屢々経験したことであり、又この融通が利かなからうものなら、明ても暮れても勉強専門には到底堪えられなかつたのである。即ち試験間際に、三角の解法に疲れた頭を、其場を去らずに歴史に持つて行つて、一向に故障は無かつたのである。つまり所脳髓の必要とするところは、睡眠は別として、決して休息ではないのである。唯變化を欲するのである。

若し之をしも計算と稱するならば、それは汗に儲けやうとして、常に兢兢たる營業成績に一分一厘の悪影響を及ぼさざる計算であつて、むしろ近來の寵語たる能率増進の秘法と稱すべきである。

我等が説く充實生活は、人間生活の一部たる不安感の満足を、此心理學上の根據に据ゑて考へやうとするのである。

五 事務所より家庭へ

疲勞れた六時間——時間割は都合次第——二時間の課程

——心意活動の内容——時間は逆比例——回想に傾する

過去

さても八時間といふ日中の勤務時間をつとめあげた我等、潤歩した朝には似ず、事務が多忙であれば多忙な丈けに、身心共に疲勞し、トポ〜と靴音重く歸つて來る。無論擔架でかつぎ込まれる程では無いが、勢力の漲つた出勤前に比べると、血色は今や蒼白に變じて居る。肩は凝る、腕は痛む、年の所爲かなと思ふと、中年者の哀愁をしみ〜と感じさせられる。頗る緩

慢な動作を以て火鉢の前に坐り込み、お湯の加減を見る妻君に

「疲勞れて居るんだよ。」

と無言の廣告をする。

「お疲勞れでムいましたでせう。」

と言はれ、ば

「ナ―にそんなでもないよ、毎日の事だ。」

と返答へるが、若し妻君が昨日いつたから今日はよからうと思つて、之をいはなからうものなら、口で催促をしない迄も、どうあつても妻君が領解しなければならぬやうな手段を取る。大きな溜息をついたり、欠伸を連發したりする。些細な事に向つ腹を立て、小供を叱つたりする。要するに「勤務は辛いもの

である」といふ氣分を、家内中に漂はせなくては承知しない。やがて一本の晩酌に夕食をすますと、口も少しは軽くなり、漸くにして復活の曙光が見えて来る。

煙草を吸ふ。食事と同格にさも大事さうに吸ふ。夕刊を見る。胡坐をかく。横になる。うる覺えのさばりが出る。廻覽雑誌のよみさしを披げる。發止！時計を見るともう十時過ぎ、ア、又寢やうかといふが早い、ソ、クサと床にもぐり込んでしまふ。

回顧すれば事務所を退出したのは正に四時。華胥の國か否かは知らず、無くて叶はぬ睡眠をとるまでに、約六時間といふもの、来る日も来る日も何一つ仕出かすこともなく、夢の如く消え、泡の如く散じて仕まう。之が幾百萬といふ我等勤め人の生

活である。夫故我等がこゝに充實生活を説かうとすると、皆ま
でいはず、

「君の言ふ所は全く結構な事だ。是非さうなくてはなるま
い。併し家へ歸つてからの我々を見給へ。第一に疲勞れて
居る。何をいふにも疲勞れて居る。せめてもの慰藉は唯寢
ることにあるのだ。時には私用の爲めに外出もする、訪問
もする。承知はして居るが出来つこは無いではないか。」

或者は嘲けり、或者は憤り毫も相手に成らうとはしないかも知
れぬ。又我等と雖も此愁訴を以て實狀でないとするものでは無
い。けれども歸宅後の六時間といふ時間に對する如此配當案を
以て、動きの取れない完全なものとは思はれない。我々の意義

ある生活といふ點から見て、隙きの無いものとはどうしても考
へられない。かくても

「出来つこは無いではないか。」
と主張するならば、我等は斷乎として

「夫は虚偽である。少くとも事實ではない。」
と言明し、且つ次の反問をなすに躊躇しない。

支配人が妻君と令嬢とをつれて、勸進帳を見物に帝劇に行く
といつたとき、偶々海外の某支店から重要な入電があつて、突
然行かれなくなる。支配人は我等の一人に「君、失敬だが切符
をさし上げるから、代りに行つて氣を着けてやつて呉れ給へ。」
——人に依つては遣り場に困つたものを呉れるのを、非常なる

恩恵と見做して居る——と命せられたならばどうであらう。之を謝絶するものは恐らくあるまいと思ふ。要らないやうな要るやうな、困つたやうな嬉しいやうな態度をして忝く頂戴する。そして切符を內衣囊うちかぶしにしかと入れてからは、記入にも計算にも勢が出て来る。通例の仕事を三十分も前に片付けて仕まう。四時になると副長が居つてもずん／＼ご免を蒙つて仕まう。電車に乗る、遅くてしやうが無いと思ふ。家の中へ躍り込む。顔や頭に念入りな化粧をする。ワイシャツを替える、カラーをダブツて、ネクタイを取ツどきのにしてピンを附けることを忘れぬ。靴は勿論エナメルのである。やつと定時前にかけて、うやく／＼しく夫人令嬢を待受ける。三太夫式にかしこまる。はね

るまで五時間といふと長く聞えるが、當人には二時間位にしか思へない。歸つても宜いといふのを無理にお邸へお供をする。自分の家へは獨りで歸つて行く。そして毎晩いっしょのやうに疲勞れたとも何ともいはず、芝居の筋を語り、且つお供の選に預つた光榮を吹聴して、暗に社内社内に於ける自己の地位をほのめかしつゝ、寢てしまふ。

我等の誰かゝこんな目に逢つたことは無いだらうか？

我等勤め人の事務所も、平生のつまらなさに似ず時としては陽気なことがある。十一月の下旬に總會を終はり、十二月に入つて半期の賞與があると、暮の忘年會は頗る盛大に舉行される。餘興の數々が計劃される。薩摩琵琶か、義太夫か、浪花節か、

手品か、歌澤か、或は即興的の道化等で、何れも日々とは違つた方面に尊敬を博さうとする。之が爲めには三週間も前から毎晩師匠の處へ通ふ。重い筈の靴を軽く鳴らして家に歸り、食事もそこ／＼に出て仕まう。欠伸などは一つもしない。妻君が「さう根をつめては障るでせう。」といふと

「ナ—に大丈夫だ。」

といふ。愈々宴會の當日演藝に取掛る。勿論誰君の歌澤、誰君の浪花節とあつても、何れも歌澤ださうです、浪花節ださうです程度のもので、最初に聲を出しすぎて、中途に杜絶して了まうのなどもある。が兎も角も大車輪でやる。

勤め人の生活にも、こんなことがないだらうか？

是は幾多の例證中から唯二つを挙げたのみである。即我等が定まつた何事かに見當をつけ、又それが我等の全力を注ぐべきものである場合には、疲勞れたといふ退出後の時間にも、如何様にも繰合せが付き、おそてはやびけ遅出早退を格言とする事務時間にも元氣よく働くことが出来る。言換へれば、我等一日の生活時たる二十四時間に、一層の輝きと一層の活勢とを添えるやうになるといふことは疑のない事實である。況んや我等の生活を豊富にし完全に爲めに、或何事かを撰んで之に勢力を集注する以上、心身共に一段の緊張を見るのは、當然のことといはねばならぬ。

打明けていつて見れば、午後四時に於て我等は必ずしも疲勞して居るのではない。且時間の割當様によつては、食事時間が決して邪魔にならぬやうにも出来る。さうすると、午後四時より十時迄の六時間から、歸りの電車時間、食事時間等を極めて寛大に計算して差引いて見ると、約三時間といふ手垢のつなかい時間を切り放すことが出来る。勿論此三時間内は必ず頭を使つて考へ事をせよといふのではない。又言つたところで其は無益である。唯先づ手始めに其三分の二、即二時間を、實は毎晩と言ひたい處ではあるが、極大目に見て、一晚おき即隔晩に之を或る重要な又一時ぎりでなく長く繼續して、相當の効果を收められる心意の開発——自分はこゝに態と精神的修養といふこ

とを避ける。其理由は後に説く機会があると思ふ——に使ふのである。さすれば他の三晩は、從來通りこれまでゐる可、縁日に行くも可、碁會所へ行くも可、何とでも勝手に消費すべきである。

假りに之の二時間の課程、否課程と改まらずとも、之を月曜の晩に始めたとすると、月、水、金の三晩のみであるから、土曜日から日曜日にかけて、次の週の月曜日の出勤時午前八時までには、官公署のお役人様ならば四十四時間、銀行會社の町人共ならば四十時間といふ、恐ろしい収入が出来るのである。二時間を隔晩に除けることに未練があるならば、此四十幾時間に大に遊ぶが宜い。例の月收幾十圓の生活法が許すならば、鎌倉へで

も箱根へでも行かれる。且つ各自の辛棒さへつくならば三晩を四晩にも五晩にもして、或る一定の緊張した努力に熱中し得るのみでなく、十時、十時半の時計の音を聞いて、

「ア、又寝やうか！」

と時間を持て餘し、床に就く前十分も二十分も愚圖つくやうな、以ての外の生活を廢止することが出来るのである。

併し之を試むるに當つて、最も注意せなければならぬことは、一週間に三度廻つて来る二時間、即百二十分といふものを、一週間即一萬八十分中の最も神聖な、最も貴重なものとするところである。即不用の切符を授つて帝劇に行き、又は宴會餘興の爲めに歌澤のお稽古に行く時間と同様に、繰合せのつかぬものであ

ることを忘れてはならない。若し芝居に行く前、お稽古に行く時に、ある友人の訪問を謝絶するならば——するならばといふが實際あつたらうと思ふ——此百二十分時にあつても斷乎として之を撃退する勇氣がなくてはならぬ。

我等は先きに「ア、又寝やうか」と時間を持て餘すといつた。又芝居の五時間を短く感ずるともいつた。是は極些細な事のやうではあるが、我等人間の一生から見れば容易ならぬ大事である。

我等が事務室にあつて事務の多忙なるとき、又家庭に在つて興味ある讀書に耽ける時は、時間の経過は頗る迅速に感じられる。もう午餐か、もう四時か、もう十時過ぎかと驚かれる。け

れど事務室が極めて閑散無事、出勤簿に判を捺したのが當日第一等の事務であるとき、又家庭にあつて欠伸をしながらごろごろするとき、時間の経過が意地の悪い程遅い。氣早のものならば時計と組打を始める程にのろ／＼して居る。

併し之を我々の記憶といふ篩ふるひにかけて置いて、回想といふ眼鏡をかけて振返へると、双眼鏡をあべこべにかけて見たほどの相違が起つて来る。先きに非常に短く感じた時間が思つたよりは長く、先きに長く感じた時間が却つて短いといふ現象が生じるのである。山と積む卓上の書類を取裁とりさばくさへ既に少なからざる勤勞であるのに、會議がある。來訪者がある。外出の用事も起るといふ毎日、春夏の送迎、秋冬の去來、三年五年は瞬く間

に過ぎ行く生活、全く嫌になつてしまふといふのは決して無理ではない。されど更闢けて、物寂かなるとき、何とはなしに安樂椅子によつたとき、旅に寝られぬとき、心靜かに其匆忙たりし過去を回想せよ。彼もした、此もした、彼の危険もあつた、此の成功もあつた。見るからに波瀾重疊、幹から枝と分け行つたならば、日を替え夜を徹しても思ひ盡せぬであらう。之に反して、例へば一定の財産がつくる利子に生くる若隱居の身分、元日より大晦日まで、平穩無事の本調子、何の苦勞もなく何の歡樂もない。又檻に飼はれたる獸の如く、我れと我身を亡しつゝ生くるといふ引づらるゝ生活、千秋の思ひをして明日の日を迎へつゝ、行く川の水の流れと共に年を経つゝ、さて回顧一番

して得たるものは何であらうか？唯寫眞の暗函のやうに黑白もわかぬ空虚である。がらんどうである。是といつて數へる程の目ぼしいものはないのである。

然らば此の如き相異は如何にして生じ來つたか？言ふ迄もなく我等の頭、即心意の活動の繁劇と沈滯、之を内容からいへば、頭を惱める事柄の豊富と貧弱、之を我等の靈妙なる心理作用が、後日の爲めに殘し置く記録の多少、之が即ち此差別の根本である。彼の斑白にして而かも年輩が教ふる以外何等の認むべきなき者、少壯にして能く經驗に富み、世故に通じ、一廉の人物たるに缺くるなきもの、皆此より生ずる相違である。

但し内容記録の一點からすると、我等の心理の作用は、元來

さうでないのを特色とするものであり乍ら、稍機械的の趣きがある。夫故其内容となつた材料其物に對しては、取捨撰擇の試験を施すものではない。唯來るまゝに拒まず否まず、其折々の頁に受付けをして行くのである。従つて其印象の強弱即ち長く記憶すると、忽にして忘却するとは、直ちに價值の高下となるものではない。幾年経つても忘れ得ざる記憶であり乍ら、思ひ出してもゾツとするのがあり、貴き經驗であり乍ら年と共にうすれ行くのもある。苦き經驗、埒もなき經驗、回想の度毎に冷汗を流し、これが爲めに今日の沈淪と、むしろ忘れ得られぬ記憶の殘酷を呪ひたくなることもあり、彼が爲に今日の成功と、ともすれば消えがちの記憶を大事がることもある。

豪傑となつて世を驚かす數奇の運命もさること乍ら、若しも
うまく行けば、偉大なる平凡たるが身の程と思はるゝ我等勤め
人に在つては、たゞの經驗、用もない經驗に可惜時間を空費し
てはならぬ。其當時にありては向上發展の重要なる内容、之を
後日にしては回想に價する過去、之を充實生活と呼ばずして他
に何があらうか！

六 週間本位の時間割

隔晩に二時間宛——一週には九時間——慣習の變革——
自尊心の擁護——問題の日曜日——最新昇給論

我等は世間の貯金をすゝめるのに反して、毎朝三十分宛の早
起きと、夜分二時間宛一週三回の貯時を考へて見た。之を一週
間に通算して見るならば、朝に三時間、夜分に六時間即ち九時
間を百六十八時間中より彈ぢきだす譯である。

元氣旺盛の少壯勤め人は、此九時間を以て不足とし、

「そんなケチな時間を以て何が出来るか。生涯の事業だと
いふ充實生活が、そんな小規模なこと何とする。自分な

らば一晩にも遣り遂げてしまふ。」

成程チヨット言ひたさうなことである。併し我等の説く所は、一時にウンと働いて後は氣の抜けたやうな受負仕事を計劃するのではない。又日中の勤務時間は勤務時間、夜分の二時間は二時間と離れ／＼の計劃でもない。他の時間と共にグウタラに消費するかも知れぬ、退出後の十六時間中より二時間、百六十八時中より九時間を救ひ出して、此間に何事かを試みやうとするのは、我等の一週間の生活を活潑にし且つ興味あらしめる爲めである。即九時間内の事業はそれ自身獨立して價值があると同時に、其効果が日中の勤務時間にも及ぶ爲めである。今日限りのものでなく、長く繼續し行くべき筈のものである。

とかく目に見、手に觸れる所謂感覺的なものでなければ満足し難い近代の傾向は、金儲け法と同時に健康長壽法を盛に唱道する。至極の思ひ付きであつて、我等の或者は之を遵奉して他に後れまいとして居る。朝夕は十分二十分宛の深呼吸をする。寒くとも暑くともやる。或者は又鐵亞鈴をふり廻す。一日中身體の具合が良い、元氣は斯う、血色はかうと事務室で吹聴する。然らばある一定時間内の體育が、其人の全身に目に見えて効果を及ぼすものとするならば、ある一定の時間内の心育が、其人の全精神生活に際立つた活氣を見るに至るといふことは、殆んど議論のないことであらう。而して心育に時間を費すことが多ければ多い丈け、其効果の大なるは言ふ迄もない。但し頂を極

むるは先づ麓よりす。我等は一見ケチと見える時間内に、ケチと思はるゝ努力を以て始めやうとするのである。尤も更に考一考すれば、之は決してケチ處ではない。既に其時間割内に生活し來りたるものには、極めて容易であるが、チャランポランの生活より、一週間内からとはいひでう九時間を取除けることは、好加減困難な事業である。そして其時間が、我等の生活を豊富にし健全にする爲めに使はれたとしても、亦一向に効力の薄い事柄に浪費されたとしても、何れは或時間内に或仕事を成し遂げるのである。即ち過去の仕來り以外に或何事かを試みやうといふのは當人の習慣の變革である。生やさしい事ではないのである。

習慣は第二の天性である。判り切つただけに偽りは無い。全く其通りであつて、之を改めることは難事の中の難事である。殊に一の變革は悪い方へは別として、多少にても善い方へ向ふとになると、必ず幾多の障害が起り、不愉快が伴つて來る。早い話が、

「ナアーニそんな事をしたつて月給が昇るんぢやなし、遊んで居た方が餘程得だ。」

といふことになる。又折角始めたにしてからが、

「さう根をつめては障るでせう、大事のお身體ですから。」
 など、妻君に甘い言葉をかけられると、大概はそれなりに往生する。偶々特志者が現はれて、是非とも其九時間を征服しや

うと意氣込んでも、若し其人がこゝにいふ九時間に極めて眞剣な、不撓な努力を注いで、而かも猶此新経験以前の生活状態を續け行かうとするならば、これは大なる誤解である。

今之を心意の方から考へるならば、從來の働き方に一の方向轉換であり、又改革である。非常なる努力を要するは勿論、犠牲も要る執着も入用である。我等は僅少な時間に、僅少な分量を以て始めよと力説するのは、事の困難を知り、且つ斯うした試みに伴ふ失敗を熟知して居るからである。

失敗は成功の母！我等も夫に相違ないと思ふ。故に茲に説く新経験に在つても、失敗はやがて終局の成功を齎らすものと言ひたいのは山々である。しかし之と同時に失敗は必ずしも成功

の母でないことを言つて置かなくてはならない。他人を激勵鼓舞するのには持つて來いの文句であるが、失敗の當事者の氣になつて見なくてはいけない。あらゆる準備をして、充分の勢力を込めて、そして或一事に取掛つて失敗したときの當事者の心はどうであらう。一切の目論見の根本には自尊心がある。然るに其自尊心が失敗といふことによつて、如何ばかり傷けられるかを考へなくてはならぬ。再思熟慮の計劃であればある丈け其負傷も痛切に感ぜらるゝのである。夫故最初一週九時間を十一時間位に見、月曜日の晩に使ふかハキリを二時間とせず、七時半から十時迄の二時間半位のものとして取掛るのが安全である。月曜日の晩が失敗しても、水曜日の晩があると言ひ出して

は際限が無い。時間は現にある限りのものである。月曜日は月曜日、水曜日は水曜日、況んや之を日曜日にしやうなどは論外である。

日曜！何といふ懐しい文字であらう！勤め人である我等は一切の希望と享樂とを唯此一日にこそと期待して居る。六日間の「辛い勤め」も此日あるが爲めに忍耐が出来る。「今度の日曜には」といふ時ほど我等の生活中に在つて氣の浮立つときはあるまい。月曜日より土曜日までの内、土曜日が特に優遇されるといふのは、半、どんと否とに拘はらず、日曜日の案内者であるからである。週間本位の充實生活は、又此日曜日を以てその重大な一日としない譯には行かない。

先づ第一に考ふべきは、我等は何故に日曜日を左程までに珍重がるかといふことである。夫は言ふまでもなく休日であるからである。事務所へ行かんでもよいからである。電車を追跡せずとも、デスクの前に立たなくてもよいからである。けれども日曜日は必ずしも休日といふものではない。同じ勤め人にして、朔日、十五日の二日を以て公休日とする者には、日曜日は風馬牛である。之は日曜日を以て直ちに休日と同意義に見做す程に廣く用ゐて居る爲めの相異である。併し茲には原則として、日曜日を休日同様に事務をとらぬものとして時間割を定むべきである。

又日曜日といへば一週間の終りに來るもの、六日稼いで一日

の骨休めと見做して居るが、事實をいへば一週間の第一日であつて、普通に考へるやうに最終日ではないのである。併し世間の慣習は意味の上からいつても、順序の上からいつても、どうしても休業日と同一視しなければ承知しないらしい。新しい慣習、而かも借り物の慣習であり乍ら、祖先傳來のものでいもあるかのやうに神聖視して居る。従つて勤め人に日曜勤務を強めるといふことは、縦令特別の手當はあつても、非常な重大事と考へられる。唯一回日曜勤務をしても、平生の精勤者であるか否かは暫く措き、さも大功勞者たるかの態度をとる。故に此神聖不可侵の慣習に敬意を表して、我等も日曜日を以て休日となし、屑く週間本位の時間割より除外しやうと思ふ。教會、講演

會、音樂會等直接修養を心掛くるもの、又公園、活動、演劇、郊外散策と間接に影響の及ぶもの等、御意の任に行き、存分に歡樂すべきである。或は氣が進まぬとあらば、何處へも行かずにごろ／＼して、忙中の閑を心行く限り味はうとも、何の故障を申立てるものではない。

唯毎度ながら、我等は次の條件を附することを念頭に置いて貰ひたい。即我等は最初の失敗を確實に避くる爲めに、二時間を正味一時間半と見積り、一週の九時間を正味七時間半位として、充分の餘裕を置くべきことを勧めたいのである。而して此第一陣第二陣の備へも挫け易い意志、又は交際等の故障に打破ぶられることもある。夫故月曜日の晩に始まつて金曜日に終る

ものを、どうしても成就し兼ねたる際は、土曜日の退出より來週の月曜日の出勤時の四十乃至四十四時間の間に結末をつけて貰ひたいのである。そして此慣習を持續して、三週間、五週間やがて三ヶ月にも及んだならば何うであらう。其成績に驚きの眼をみはると同時に、天下何物か能くし得ざるものあらん哉の確信を有する至るであらう。

我等は習慣の變革を述べる際に、我れ知らず「月給」といふ文字に出會した。有體にいへば、月收幾何、月給何圓といふが如き金錢問題と、充實生活如何との問題とは殆んど無關係であつて、前者に觸れることなくして、優に後者を解決し得るのを心密かに快として居つたのである。何となれば、我等が退出後の

十六時間は、唯己れの身心を練磨し、餘力あらば之を他に及ぼす以外——内職は別問題——何等に爲すべきことがない筈である。即此間は我等勤め人にとつては、存分に自由の空氣を呼吸し得る時間であつて、月給取りでもなければ、又儲けやう儲けやうに血眼の商人でもない、日中の八時間にこそは眞黒になつて働きもするが、一旦退出後となると丸持長者ミリオネヤと同様であつて、傭主被傭者の觀念を脱却し、一切の金錢氣かかけを洗ひ去り、慾氣を度外視してよいのである。此態度、此心掛、之を充實生活の上より見るならば、最も肝要なものであつて、生涯の成功不成功は、斯うした氣の取りやう一つにあることを忘れてはならない。

而して偶然にもあれ一旦之に觸れた以上、月收生活者の必須條件である月給問題と、こゝにいふ充實生活とは、間接にもあれ、結局に於て如何に關係して行くかといふことを見るも、強ち無用ではあるまい。

あまり品のよい言葉ではないが、役人には役人根性、勤め人には勤め人根性といふものがある。何かにつけて付き纏ふ臭氣である。一枚の調査物をして、一回の走り使ひをして、退出時間後僅かに半時間を官廳の爲め、會社の爲めに働いても、大なる損をしたかに思ふのである。さうして之が積るともうそろ／＼月給を昇せさうなものと胸算用を始めるのである。定期昇給の如きは預金の利子と同じく當然と心得て居る。——但し辭

令交附の際は上役の特別扱であるかの如く低頭する——偶々事務員獎勵の目的を以て、拔擢昇給を見ることがあるが、其當人には奏効しても、他の事務員はむしろ猜忌の眼を以て見る。「何分よろしく」と辭令を持廻るのに對し、「お目でたう」とはいつでも、「奴め胡麻を摺つたな」と肚の中では憤慨の蟲がむく／＼と頭を擡げる。元より好んでこの根性を養成するのではないが、月俸の多少を直ちに人物の高下と見らるゝ勤め人生活には餘儀なき一面であつて、眞に他人の昇進を謳歌するが如きは、餘程勤め人放れのしたものである。併し斯くいへばとて月給を考へることを以て、不都合な所爲といふのではない。一家幾口の生活の唯一資本であるから、望みとあらば四六時中考へ通し

てもよい。「どうぞよろしく」と阿諛おべつかをしてもよい。唯次のやうに考へた上のことにして貰ひたい。

「どうぞよろしく」、「何分よろしく」。いつの世からの慣はしかは知らぬが、我等勤め人といはず我國の社會には、此等の言葉が盛に使用される。之をすれば特別の恩恵がある如くに使ふ。對手がころりと參るかに思つて使ふ。大に匙加減をして下さいといふやうにもとれる。まことに奇怪な、重寶な言葉である。

手近の例をとつて言ふならば、我等は求職運動ヂョツクヘンチンクをするときはよく之を使ふ。併し今日の勤め人は昔日の夫の如く、情實因縁によつて雇つたり雇はれたりするものとのみ考へるのは誤り

である。請托を以て採否を決する前に、當人の實力如何といふ事が第一の資格である。間に合うか合はぬかと問題決定の要件である。夫故如何はしい腕を持つて行つて、「何分よろしく」と三拜九拜の安賣をしても、肝腎の内容が貧弱であつては物にならない。又雇主にあつても夫では「よろしく」しやうのないものである。我等は此點に於て須らく從來の舊習慣を打破しなくてはならぬ。求職といふもつまりは商品の賣りつけである。外觀みえもいるが要は品質如何にある。輕業師の如くうまく渡り暮さうといふのは最早時代後れである。此點にかけては米國流は頗る簡單であると思ふ。雇主は事務は何々といふ。求職者は報酬幾何といふ。需要者と供給者とが一致すれば可矣よし、然らざれば「左

様なら」である。「何分よろしく」とも言ふにはいはうが、我國に見るが如く萬事之に決するが如くにはいはないのである。鑑るべきではあるまいか。

我が充實生活は是の點に於ては甚だ氣前がよい。すつきりといさぎよい。其直接の目的は精神的修養にある。碎いていへば智力の増進と意志の鍛練とである。一週の九時間に如何なる題目を充てるにしても、其態度は研究であり、堅忍であり、自疆である。精神に盜食かくしひなしといふ我等の頭は、其効果を全體に押し及ぼす。月給月給と心を痛ましめずとも、内より溢るゝ勇氣と、敏活と、練達とは他をして認めしめずには置かない。即ち昇給の捷徑は可成月給といふ考から、充實的に遠とほざかるのにあ

る。斯くても上役が之を認めぬならば、夫は低能長官であり、低能重役である。構ふ可からず。我等は唯孜々としてペンをとり算盤をはじくべきである。

七 往きの電車時間

電車と勤め人——心力の集注——車内最後の十分——前
事務時間の回顧——感情問題——當日の事務豫定

電車と勤め人！如何なる運命の巡り合せであらうか？降つても照つても一週中の六日は、必ず一日二度宛の乗り降りをする。夫ならば友人程に親しいかを見ると、幾年乗つても幾人に出逢つても、申合せたやうに悪口のみ盛んであつて、唯一言も譽めはしない。全く喜び勇んで乗るのは、下駄をぬいて窓に向ふ坊ちゃんや嬢ちゃん位のものである。我々の多くは電車をのりすて、事務室のストローツの前に立つと、誰かしら電車の話をする。

運転手が、車掌が、腰掛が、窓がと、何かしら攻撃の材料をかつぎ出す。平生頭を下げ通しの我等は、一寸した瑕瑾てんかりをも假借せずによりこめて、事務室の仇きを電車で取らうとするかにも見える。

最も無事であり平和である方法は、犬と猿にも似たる電車交際をやめて、俥に乗るか徒歩にするかに在る。けれども俥での往復は、普通にいふ月收生活者を超越した階級に属する。さらば徒歩はといふに、電車の通じたるを幸ひに、且つ郊外といふ美名の下に、市外へ市外へと散らばつて行く爲めに、二里三里乃至四里の道程を歩くものとすれば、是は電車より外に他に方法はないのである。のみならず月收生活法の支出案が許さな

い。従つて嫌な響きを出す電車、氣持のよくない腰掛の電車、地形の綱を引く女労働者のやうに吊り下る電車、入口でムツといふ車内の温氣にあてられる電車、時としては前後左右にこづき廻はされる電車に、否應なしに乗らなくてはならないのである。若しさうでないならば、何を措いても駈け附ける筈の事務所へは行かれず、日收二十四時間の支出案にも重大な變化が起つて来る。是は到底我慢の出来ぬことである。飛乗り飛降りには危険と知り乍ら、依然として電車に乗るべき運命である。否電車なくしては、我等勤め人の生活は不成立である。文句を言ふ處ではないのである。

併し乍ら不快な方面のみを探索する片意地をせず、また異

つた側から眺めてみると、電車相應な快味が湧いて來ないでもない。見よ兩側の家々が未だ全く起きゝらぬ頃、急ぐともなく停留場に佇む。西より東より長き兩髭を怒らして走る電車は、宛然活動の權化でもあるかのやう、覺めよ起きよと満都の市民に觸太鼓を廻はすのである。或は春まだ早くして外套の襟を立てながらも、入口からの風に迷ひ込んだブンといふ芳香、思はず向側に咲く白梅に辿りつくこともある。否我等勤め人には、そんな出過ぎた風流は別としても、雨の晨雪の夕、濡れず凍えず往復が出来るのではないか。

又終日事務室に閉ぢ込み勝な我等は、明けても暮れても同じ顔が目につき鼻につく。外界とは容易に接し得られない。世間

は如何に變はり行くかを親しく見る譯には行かない。然るに朝夕の電車は、この缺陷を償うて餘りある。幾多の廣告は常に新粧を凝らして、新發明新工夫の商品を買へよとすすめる。春は春、秋は秋、夫々の繪模様の中に歌舞伎、活動の藝題も披露される。唯に廣告のみではない。見渡せば車内の乗客、げに乗合船の夫の如く、老若男女貴賤都鄙、夫々の顔付夫々の身装、睨め合ひといはずに、夫となく觀察の面を向けたならば、往復拾錢には廉い學問が出来るのである。行く先きは同じ虎の門でも、未來の才媛たるべく女學館に通ふお嬢さんもあれば、唯後世安樂と祈る金毘羅詣りのお媼さんもある。又乗換へは同じ須田町でも、學問の蘊奥を極むといふ角帽の書生さんもあれば、

日本橋の百貨店に色様々の大切れ小切れを、斷ちづめ度りづめの番頭さんもある。誠に電車なればこそである。品川から上野、丸の内から深川、日本橋に交叉して右往左往の乗換、煩いやうでも之がなければ、東京中の事務所といふ事務所悉く上つたりである。勤め人と電車、どうしても逃れぬ縁ではある。

夫にしても充實生活から見た我々の電車時間は、唯乗りさへすればよいのではない。家を出てから事務所迄の五十分此儘には過されない。否此間の時間こそは我等一日の生活の完きか否かに關係ある重大な發端である。即ち支出案通り三十分早起をする筈の我等は、ソ、クサと家を飛び出しても、又緩々と威儀を正して出ても——出る前は家族の何人に對しても、つとめて機

嫌を克くすべきである。是は一日の氣分に深く影響するものである——紋切形ではあるが、「行つていらつしやいませ」といふ挨拶に送られて一步踏み出したならば、必ずある一個の格言なり、金言なり、名文句なり、譬なりを問題とし、之に全心力を集注したいと思ふ。例へば「過而改むるに憚ること勿れ」、「論より證據」、「一文客みの百失ひ」、「義を見て爲さざるは勇なきなり」等何れであつてもよい。又袖珍格言集の一文句、或は電柱廣告の金言等、見るに従つて取るも差支へない。兎も角もある一問題を捕へて、之を頭の真中に据えればよいのである。

そこで我等の或者は、即刻にある題目をとつて頭に入れたとする。併しこの題目は如何ばかり長くそこに止まるであらう

か？横町の角を曲らぬうちに逃げ出しはしはすまいか、電車の走るのがチラと見えたらならば、跡方もなく消え失せはすまいか？

何が爲めに之を試みるか？言ふまでもなく第一には心力集中の爲め、第二には修養の一端としての練習である。故に幾回といふ限りはなく、逃ぐるに随つて之を引戻し、有らゆる努力を以て之を取圍み、新鮮な頭の活動を試すべきである。而して世には精神の統一を以て、修養上の一練習と見做し、唯静觀の一方便となすものがあるが、夫等は如何なる意味であらうとも、茲に問ふ處ではない。我等の主張する心力の集注は次の條件に基礎を置くものである。

改めて言ふ迄も無いが、營利的であらうと又さうでなからうと、今日の事務といふ事務は恐ろしく複雑なものである。就中ある種類の事務になると、國內は勿論、海外の數十個所に連絡があり又影響も起る。故に内外四方の敏活と、迅速と、確實とを期する爲めには、渾身の努力を以て其心的活動を援けなくてはならない。或は設計といひ、或は計算といひ、何れも一分一厘の差を争ふものであつて、一の單位のやりとりではなく、其十分、百分、千分の幾何か、やがて巨萬の利益となり又損失となるべきを、幾年前の今日手に取るやうに見やうとするのであつて、端數を鷹揚に取扱つた過去の商賣振りとは、似も附かぬ相違である。故に平生この習慣を養成し、自ら心力活動の專

制王となつて、命令禁止一に其意に従ふのでなかつたならば、今日の進歩したる、所謂高等事務の局に當ることは覺束ないのみならず勤め人としての第一の資格を缺くものである。

我等は電車内に於て、頻りに腹部を膨脹せしめ、同時にブーッと大呼吸をする人を見ることが屢々ある。或は流行の何式呼吸法であるかとも思はれる。そして車室内の清潔でも無い空氣の出し入れは、門外漢の我等には躊躇される冒険である。されどこゝにいふ心力の集注は、斯程重大な意義を有するに拘はらず、其實行は頗る簡單である。何等のお道具もいらぬ。教科書もいらぬ。唯思ひを或一點に潜めればよいのである。腰を掛けて爲すによく、吊革に縋つてするも差支は無い。其上隣り

知らずに出て、衆人の環視を受ける患はない。極めて静肅に實行することの出来るのは、何よりの便利である。

「言ふことは易く行ふことは難い。」

ある者はいふであらう。然り、實際容易ではないが、決して不可能ではない。能はざるに非らず爲さざるなり、唯努力を吝むのである。之に就いては我等は我等自身の経験を次に述べて見たいと思ふ。

夫は海外の某支店行きの手紙であつた。退出の際に誤謬なきを充分に認めて投函させたものであつて、退出後の十六時間を例の如く何等の不安なくして過したのである。然るに翌朝着替えをする際に、思はず衣囊を探つて見ると、其手紙の反古らし

いものが出たのである。見るともなしに見ると、印字の9が6であるかどうか頗る明瞭でない、執筆の際の記憶を辿つて見ると、それは9でなくてはならぬのである。若しもそれが6として先方へ行つたとすると、差額三萬弗を生ずる譯である。一寸青くならざるを得ない事件である。電車内のことおいつは申す迄もない。頭は唯9か6を中心に廻轉して居るのみである。三十七分乃至四十分の電車時間が、一時間以上にも思はれる。いつも買ふ乗換場の新聞賣子の促がすに目も呉れず、焦立ちきつて事務所にかけてける。昇降機の降るのを待たずに階段を上つて却つて多分の時間を費し、寫書類綴りを取り出して9であることを發見し、自分にも驚く程の大きな息をホッと吐いたので

あつた。

之を以て見ると心力の集注といふことは。決して不可能のことではなく、約一時間といふもの他の何事をも考へしめず、専ら或一點に凝集せしめ、正か誤かを確めて後始めて解放したのである。或は之を特殊の例と呼ぶかも知れぬ。又或はさうかも知れぬ。けれども心力其物は事件の何たるを問ふものでない。數字の故に集中し、格言の故に散亂するといふ筈のものではない。其對象は甲であり乙であるに論なく、思ひつめる心の作用に變りはないのである。ドシ／＼練習を續くべきである。

充實生活は、心力集注の練習といふ此一課程を、事務所に着く十分前迄に繼續實行するのである。而して残りの十分は、事

務時間に入る準備として次の諸件に充てなくてはならない。

第一 前事務時間の回顧

以上の心力集注に第一の經驗を得た我等は、此餘勢を驅つて之を回想に轉せしむべきである。別して前事務時間の出來事は、あらゆる回想の材料中最も新しく、従つて最も明瞭なものである。故に之を整頓して各其所を得せしむることは、必要であると同時に又有効な手段である。

言ふまでもなく執務中の時間は、何はともあれ繁忙である。

「忙しいか」と聞く。「お忙しいでせう」と尋ねる。實際は何であらうとも、事務室内は多忙なものと認定されてある。又場合によつては目の廻るほどたて込むこともある。次ぎ／＼に來る書

類、計算書其他の處理に迫られて、此間何等の批判點檢を加ふる餘裕が無い。それを再び事務を開始する前に當つて、徐ろに検査しやうといふのである。計算の方法に遺漏は無かつたか？事務の取扱ひがハロクサではなかつたか？書類は手際よく出来て居つたかどうか？從來の慣習中に改定を加ふべき點がなかつたかどうか？他會社他店の書類用紙と、自家の書類と用紙とを比較して、學ぶべき點は無かつたか？思ひ浮ぶ節々を片つぱしから嚴重に批評を加ふべきである。そして長を採り短を補ふの料となすべく、其結果を頭の記録に留むべきである。單に當日の爲めの回顧ではなく、來日の準備であることは先きに説いた通りである。

第二 感情問題

よく聞きもし又用ゐるもする言葉であるが、如何にも「人は感情の動物」である。相手の思惑おもひわくが自分に好都合であれば、これ位便利なことはなく、少々の無理も通り、爲ることが順風に帆を揚げたやうにすらくと運ばれるのである。之に反して些かにても調子が狂つたとなると、理窟は如何ほど正當であつても、少しも進行しないことが起つて来る。所謂臍を曲げたとなると全く手の着けやうの無いものである。是は執務上最も注意すべき要件であつて、常に細心の注意を要するのである。夫故己れの他に對する態度、即上役並に同僚又は顧客に對する自家の態度が、他の好感情を催起するに足るものか、又は之に缺くる處

があるか、或は前日の執務時中にあつて、自分には夫と心付がなくとも、先方の心を傷ける言語舉動が無かつたかどうか？ 須らく反省熟慮すべきである。あまりに尊大なるは元よりよくはないが、あまりに謙遜なるも考へものである。又人によつては只管に他人の感情思惑のみを念として、他からは一見滑稽と思はるゝ程に兢々たるのがあるが、これは過ぎたるは猶及ばざるが如しの例證である。要は只中庸に立脚すべく、常住其用意をかゝぬことである。

第三 當日の事務豫定

これは事務所に這入つて、すぐに取掛るべき事務の豫定である。何事にも見込みはあると均しく、只他人の命令に聽くをの

み考ふべきではない。自ら準備しなくも他はよく命令する。夫れにさへよるならば責任は盡きる。敢て餘計な心配をするものではないとするのは、故意に自己を奴隸にし、器械的にするものである。如何なる簡易な事務であるにしても、之を自己のものとし工夫を盡して仕上げるのでないならば、到底満足なものは出来ない。彼をあゝ、此をこうと前以て考ふべきである。而かも其効果は之を無豫定のものと比較して到底同日の談ではない。敢て我等の力説を待たずとも、勤め人の日々の執務といふ活きた事實に徴したならば、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

世に思想ほど迅きものなしといふ。豫定の五十分には勝ち過

きた荷物と見えるが、今日に次ぐに明日を以てし、つぎ／＼に慣して行つたならば、決して難事ではないと思ふ。乗換へは可成りに煩はしくあるが、第一の次ぎに此第二を以てし、且つ一日二十四時間の収入ではなく、むしろ一百時間もある國から来たもの、やうに、車室内では悠然と構へ込み、豫定の如く頭を働かして、さて「お早う」と勢ひよく事務所の扉を開くべきである。

八 復りの電車時間

昇進の見込み——書生放れ——収入と將來——對他の態度——事務と先天——言行の一致

我等は前章に於て心力の集注を説いた。また之を直ちに回想に應用すべきをも説いた。而して此二つのものは、日中の八時間の事務時間にも、又退出後の十六時間にも非常なる影響を與ふるものたることをも説いた。且つ之が反覆はやがて習慣を生み、最初の困難は漸次に容易となり、格別の努力なくして出来るやうになるとしたならば、其沈黙考の好慣習に如何なる方向を與へ、又如何に之を利用すべきであらうか？

又我等は先きに勤め人の不安を説いた。而して此不安感は、言ふまでもなく満足せしめられざる要求によるものであること、並に飽くなき此要求は、我等日常生活の根本動力であることをも説いた。而して何人が如何なる要求の爲めに懊惱たるか、別言すれば其要求の内容如何は、其人の性向と所志とによつて定まるものであつて、大方は百人百色、人それぞれの決定に待つものである。故に商人の念とする處は只金の一點であるならば、志士の憂ひとするところは國家であり、緇徒の惱みとするところは衆生の濟度である。

然らば何の巡り合せか勤め人となつて、月收幾何圓の生活に一家幾口を支ふる我等は、抑々何を患とするであらうか？ 隠し

立てをせず極正直の處をいふならば、只幸福であるといふ外はない。其内譯は何であらうとも。

併し内譯の無い請求書は受取證の體を爲さぬものである。我等は一步進んで何人の幸福か？ 妻君の幸福か子女の幸福かと尋ねなくてはならぬ。之に對し我等は何を措いても先づ自分の幸福と斷言するを憚らない。

然^し矣。我等は社會國家の爲め、又人の爲め神の爲めと、大にお爲めこかしを職業とするかの如き人々の蔓る中に立つて、怯めず臆せず自己の幸福のみと斷言し得る自信と勇氣とを、幸か不幸か養成され來つたのである。而かも此自信と勇氣とは、全然合理的に出來上つて居ることも亦充分に確信して居る。が勤

め人又は商賣人にはさうした議論は禁物である。先以て目指す幸福が、如何にして得らるべきかを調査して見やうではないか。但し直様其研究にとりかゝるといふことは、研究者の危険に於て取掛ることとなるのである。何故といふに第一の段取りとして自己評價を先きにしないからである。自己といふ代物を税關へ持込んで、一々點檢して貰ふべきである。隠匿などは以ての外である。

それにしても自己評價！何といふ現代味の勝つた文字であらう！^{うづはり}梁があらうと構はず、從來外界専門であつた兩の眼を、グイと内側へ向け直すのである。妻子や親兄弟を後にして自分自身を仔細に觀察するのである。

第一 昇進の見込があるかどうか？

是は勤め人たる以上最先に考ふべきことである。其實なくして其位を望むのは、いつの世とても變りはない。故に高等官とならうとするならば、文官高等試験の合格者か否かと顧みれば直ぐに判ることである。又支配人たらんとするならば、力量も勿論ではあるが、財閥閥も忽かせにはならない。之を以て男子の口にするを^{いさげ}屑しとせざる處であると大に憤慨するかも知れぬが、之は虚偽ではない。現存の事實である。妻君が田舎の水呑百姓の娘であつて、自分が時々月給の前借りをする現状ならば潔く見切りをつけるがよい。言ふまでもなく實力は最後の解決者ではあるが、資本家の住む實業界には、人を道具に使は

うといふ以外、他の方法を知らないかの感がある。多くを期待するは失望の基である。只年功を積み鰻登りを目途とする外はない。

第二 書生放れをして居るかどうか？

「我輩の眞價はこゝにあるんぢやないよ。只食ふ爲めに來て居るのだ。あまり見降して貰うまい。」

學校を出立^てたの勤め人からよく聞かされる氣焔である。學校時代の生活と、事務所つとめの現在との相異が、あまりに甚だしい爲めに、斯うした燕趙悲歌の士も現はれるのである。成程五斗米の爲めに腰を屈するのは男子の耻づる所かも知れないが、事務所の扉^{ドア}を一旦開けた以上は眞劍に事務を執るべきである。

判任官の内はかうでも、高等官になればやるとか。書記としてはかうだが、係長になればどうか唯氣勢をのみ張つて、こんなことはと今日現在の事務を、唯可然^{しかるべく}取扱ふのは沙汰の限りである。今日に其職務の完了を期し、之を實行しやうとせぬ勤め人は落第である。明日になつても駄目である。兎を搏つも全力である。書生時代の華想を思ひ遣らぬではないが、事務所員といふ現實の眼を一刻も早く見開かなくてはならないのである。

第三 収入と將來

現在の俸給に定期昇給を見込み、十五年勤續の恩給や退職手当を豫定収入として、家庭といふ船を運轉して行けるかどうかの問題である。生活難と最も緊密な事柄である。今日の婦人雜

誌に見る月收生活法には、十五圓でも二十圓でも必ず貯金額を掲げて、以て幾何かの賞金にありついて居るが、其貯金又は保険に均しい恩給や退職手當は、將來を確保するに足るかどうか、金の問題としてよりも實は一家の主人公としての責任問題である。考へずには置かれぬのである。假りに月給五十圓とする。年齢を三十五歳とする。年額六百圓、人生五十迄の總額は九千圓である。噫九千圓！一時に頂戴しても一萬圓には足らないのである。而して之と同額の恩給や手當は到底望まれない。轉職を企てるとしやうか？求職難を奈何！轉業を目論見やうか？無資本を奈何！結局は泣寝入りの並木生活、歳々春秋を送迎してやがて立ち乍ら枯れるのである。情ない問題である。

第四 對他の態度

上官、同僚、お客様等に對し、自己の態度はごうであらうか？人附きが良いか不良わるいか、蟲の好く男かどうか、お辨茶羅べんちゃらに過ぎはせぬか、輕卒ではないか、鋭い眼をみはつて、検査をすべきである。何となれば人間は勤め人であらうと何であらうと、要するに共同生活を營ますには居られない。而して其共同生活の一人として他に交はる以上、自分が他の諸員に對してどう映つて居るかを見定めなくてはならない。之れ取も直さず自身身の爲めであつて、事務の敏活の爲めにも共働共勞の爲めにも必要なことである。

考へて見れば我等の多數は、妙な弊風に囚はれて居ると思ふ。

上役や同僚——就中高給者——に對しては大に爪をかくす。普通の事務を祭典の儀式のやうに馬鹿鄭重にする。官廳にあつては益々官僚式を發揮し、會社銀行に入つては縞の羽織や前垂れをとらうとする。けれども之れは人前の假粧である。他に對する懸直なき本性の暴露するのは、給仕や小供を取扱ふ時である。例へば給仕が午後二時半から三時頃のお茶を配る際に、誤つて塵ちりの浮んだのを心付かずに置いて行つたとする。之を見た我等の或者は聲色を勵まして、「給仕！」と呼ばないかどうか。「之が吞まれるかッ」と叱らないかどうか。ごうも叱りさうに思はれる。又是には止とどまらない。執務中の不平は悉く之を給仕や小供に當り散らす傾向もある。彼等少年勤務者は、未來は何

であらうとも、給仕たり小供たるかぎり、普通勤め人の不平捨場の觀がある。之は唯平生の如く靜かに給仕を呼んで、「取替へて來い」と命すれば事は足りるのである。四邊あたりも噪がさず、給仕にも悪感を抱かせず、自分自身の體面も汚がさず、三方四方圓く納まるのである。第一叱りつけたところで塵はひとりでは除かれはしないのである。而して之を爲す工夫は、唯冷靜な理性との相談にある。之を顧問とさへするならば、出勤より退出までの八時間、極めて順調に経過すべきである。

第五 執務と先天の性向

是は頗る大問題である。細かに論ずるならば幾章を更へても足りない。けれども茲には我等の執る事務と自己の先天の性向

とが、戀人同志の如く積極的、理想的に合體せずとも、少くとも仲違ひでは無い程度、お隣の伯母さん位を出立點として考へて見たいと思ふ。ある勤め人になると、其母算盤懐中に入ると夢見て生んだのかどうか知らぬが、さうぢや無いかと思はれる程に、八時間ぶつ通しに球を弾くを苦としなないものもある。極めて罕に見るところである。大概は「食はずには居られない」といふ峻烈な現實を背景にして、兎も角も平和を維持して居るのである。

併し乍ら唯食はんが爲めにのみ、文藝上の天才、科學上の天才と稱すべき者、又はどうしても刀筆の吏たるに適せぬ資質の者が、殆んど嫌忌の感を以て、或は帳簿を繰り、或は銀貨を數

へ、或は傳票を綴り込むといふのならば、これは考へ物である。即ち日々の執務に何等の興味何等の愉快を發見し得ず、事務室を牢獄の如く、上役を監守の如く恐れるならば、むしろ潔く之を捨て、其本領に向ひ、其天才を發揮し、廣く人類の幸福と社會の進歩とに貢献すべきである。一藝一能に優秀なるものが、心ならずも之を腐らして、味もそつても無い業務に携はるべき餘儀なき運命を見るほど、世に悲惨なるはあるまい。是れ天才者の傳記が、往々にして斯くの如き撞着生活史の記録たる所以である。若し之に反して、お隣りのお伯母さん程度を以て出立し得るならば、出來得る限り之に親和する手段をとり、法學士も銀行に入らばつとめて紙幣の數へ方を練習し、庭球の選手も

商館に入らば、喜んで印字機タイプライターをたゝかなくてはならない。

第六 言行一致

他の文字を以てすれば、主義と行爲との一致不一致である。勤め人といつても我等は教育ある勤め人である。内端に見ても現代の新教育に養はれ、新思想に浸つた高等労働者である。細かい所は別としても日々の自己の行動、乃至家族の各員を律し行く大體の方針がなくてはならぬ。或は寸毫の假借せざる嚴肅主義のものもあらう。或は快樂是れ善なりとする頗る融通の利く快樂主義者もあらう。又よしや斯の如き大問題でなくとも、盃を手にせぬといふ禁酒主義、電車賃を蹴出さうといふ徒歩主義、或は玄米主義、或は二食主義、曰く何、曰く何と千差萬別

の主義がある。而して之を以て自家の行爲を統一し、整頓する方針と決した以上は、如何なる犠牲を拂つても之に相應しなくてはならぬのである。他を責めることのみ嚴肅主義であつたり、又は晚酌のみ禁酒主義であつて、宴會に行つてはへいけ主義であつたりしては申譯が立たない。大事であれ、小事であれ、其主義の實現これ其人の行爲となつて來なくては面白くない。又一旦言行一致の好慣習を得たとすると、其歴史、其記録を毀損しない爲めに、何事を放棄しても之を擁護するといふ執着を生ずるに至るものである。我等の或者は、無缺勤者を以て精勤主義と稱し、馬鹿律義の異名とするが、一年三百六十有餘日皆勤の成績を擧ぐるには、自己はいふまでもなく、家庭其他

が如何ばかり勢援と犠牲とを供給して居るかを考へなくてはならない。又言行の一致は、同じ勤め人に在つても、使はるゝものよりは使ふ者が、殊に留意すべき必須要件である。命令者の言行不一致は、部下に對し懈怠と不統一とを招く基であつて、*ガラシ*のない執務振りを現出するに至るものである。

扱て我等の行動を、以上六項の自己評價の標準に照らして幸に満點を得るならば、幸福の研究は大半成就せられたものである。何となれば自己を観察するに以上の大綱を以て臨めば、飛放れた誤算をしないからである。何處までは己れの達し得る範圍であり、夫れから先きは他の人の關係する處といふ見極めがつくからである。我等の説く根本の不安は、日毎に洩らす勤め

人の不平ではない。ブツブツといふ小言でもない。幸福である不幸であるに論なく、均しく起り來る欲望の不満感である。故に顯揚と碌々と、濁富と清貧とを離れて、先づ自家の幸福を追ひ求めやうとするならば、これ程の基礎工事は是非とも必要である。而して此基礎の上に建設せられたる充實生活、とりも直さず我等の幸福でなくてはならない。

こゝに一言の斷りをして置きたいのは、我等が先きに何を措いても自己の幸福と斷言したことである。是れは決して自利主義、又は利己主義の意味ではない。我等は自己の完全なる幸福は、他と何等の關係と交渉とをなくして、獲得せらるゝものではないことを承知して居る。周圍の人と物とから切離した自己は、

遂に何等の意義を有しないことを實驗して居る。従つて「己れの欲せざる所人に之を施す勿れ」といふも、「己れ達せんとせば先づ人を達せしむ」といふも、自己の幸福の追求と撞着の無いばかりでなく、或る場合にはこれが却つて自己の幸福であるといふことも辨^{わか}へて居る。

可^よ矣。それならば此長たらしい自己評價の諸項を、何時^{いつ}何處^{どこ}で沈黙考すべきであるか。我等は之が爲めに退出後電車内の五十分を以てしたいと思ふ。一日の勞を終はりて、唯家庭に歸り行くのみの人であるときの氣分は、以上の反省に最も適當の時機である。必ずしも此全體を考へよといふのではない。其一を取るもよく其二を^選むも妨げない。要は唯眼を内に轉じて、

上下四方よりためつすがめつ眺むべきである。そして生活の爲めの一日の勞働に對して、精神的檢印を施し、靴も軽く氣も軽く、「只今」と格子に手をかくべきである。

九 最初の二時間

讀書には限らぬ——硬いと軟かいと——文藝と科學——
眼前の電燈——新知識の吸収——縁喜のよい出立

毎朝三十分の早起、往復電車の五十分宛に、何を爲すべきかを決定した我等は、夜分の最初の二時間に何を選むべきかを問題とすることゝなつた。

先きに我等は玉突を如何に始むべきかを説いた際に、只「始めさへすれば宜いのだ」といつた。が夫は玉突といふ一個の目的物が出来てからの事である。この見當のつかぬ以前には、玉突か、スケータチングか、將碁か、圍碁かと相應に思ひ迷つたに

違ひない。それを「此だ」と決定させたものは、同僚の某々氏等の煽動にもよるが、主としては「面白いだらう」、「あれならやれるだらう」といふ自己の嗜好と自信とが、最後の斷案を與へたのであつた。

而して此に決定すべき我等の問題は、其重要さに於て、其意義に於て、輕重に於て格段の相違はあるが、最初の二時間に何を選むべきかの手続きは、矢張り同様であるといはなければならぬ。或者は此期に及んで猶反抗の聲を揚げ、

「其二時間に書物でも讀めといふのか？ 疲勞^{つか}れた頭に硬いものは讀まれないぢやないか。といつて文學物なんか大嫌いだ。ごろ／＼する外に仕様が無いぢやないか。」

と食つてかゝるかも知れない。

併し我等は充實生活を説き始めて以來、書物を讀めと命令した覚えはない。又只の一回も文學物を繕けといつたこともない。然るをさも我等が勸説たものゝやうに取られるのは、近頃以て迷惑千萬である。が之と同時に、我等の最も興味ありとするのは、この抗議の中に何を選むべきかに對する當事者の心裡を、よく説明して居ることである。世に謂ふ「問ふに落ちず、語るに落ちる」ものである。第一に彼は書物といふ。第二に硬い物は讀まれぬといふ。而して第三に文學物と獨斷する。但し嫌いだからごろ／＼するより外に仕様がなまいといふのは、これは彼の勝手に並べた附録である。我等にあつては何の關係する

所の無いものである。我等は以下に第一より第三に至る経過をも少し考へて見たいと思ふ。

第一に讀書といふ。是は夜分の課程として最も相應はしいものである。何人もさうと氣のつく處である。只燈火の下に凝つと讀めばよいのである。決して他人の手を煩はさず、ごく始末のよいものである。併し斷つて置きたいのは、この二時間を有効に消費することは、必ずしも讀書に限つたことでは無いといふことである。勿論或一科の學問、例へば法律なり經濟なり、又其分派の銀行論なり取引論なりを研究するのには、どうしても書籍の力を借らなくてはならぬ。之に反し繪畫、音樂、演劇といふが如きものに手を染めやうといふならば、書籍は強ちに

必要ではない。一枚でも見ればよいのである。一幕でも一曲でも、覗いたり聴いたりすればよいのである。只其領解を迅速ならしむる爲めに、近頃に見る簡單なる叢書物から、一般的知識を得れば充分である。

假りに繪畫を以ていつて見るならば、其初め油繪を以てペンキ屋の繪看板と同一視する者であつても、又一二回の書會行きでは、赤く青くけばくしいもの、前にのみ立留まつても、やがて構圖を領解し、色彩を味はい、配合、着想を云爲するやうになれば、招かれずして之に赴くやうになるのは必定である。即書室の内に存在したものが、間もなくそこに生活し得るやうになるのである。敢て非而似鑑賞家となるのではなく、繪畫の

内に自己を見出す底の領解にすゝむのであつて、決して出來難い事ではない。

第二に硬くないものといふ。これは頭の働きに勞逸變換の理法あること、即休息にあらすして變化を要するものであることを、思はず裏書したものである。但し硬くないものといふ内には、娛樂の爲め、時間の空費を防ぐ位の意味が含まれて居る丈けであつて、積極的に研究するといふ程の覺悟が無い。只申譯的である。自ら進んでするのではない。眞に研究の題目である以上、硬い物に次ぐに硬い物を以てするも、同じ題目でさへないならば、一向に差支は無い筈である。軟かいものといふ處に好加減さを自白して居る。充實生活の爲めの或物であるなら

ば、硬軟を標準とせずして、自家の根本の欲望を満足せしめ得るもの、自家の性向とピッタリ合つたものを選まなくてはならぬ。

第三に文學物といふ。普通誰れもの頭に浮ぶところであつて、我等の同僚は、イザ何か仕やうとなると必ず文學といふ。よし文學といふ高尚の名は過分であるとするならば、正直のところ小説や講談である。而して縮刷物の何々叢書をポケットに忍ばせて置くのを、非常に優雅なこととして居る。算盤を弄びながらも、一面に「斯うだぞ」と思ひ知らせるらしく見える。

今之をも少し嚴密に解剖して見るならば、我國在來の傾向が直接生活の資を得る以外のことゝなると、直ちに廣い意味の風

流と解し、和歌俳句のやうに即興的に雅懷をのべるのを美風と見做した歴史的の情力も手傳つて居る。又或者は文學を以て、一個の嗜み、紳士淑女の心得置くべきまさかの時の用意、衣食足つて後にする餘計もの位に思つて居る。そして何れも之に重大な意義を持たせやうとはしない。

さり乍ら之を近代に見ると大に趣きが違つて居る。特に現代の教育を受けた少壯勤め人となると、文學を以て娛樂半分のものとは見ない。形式は詩であり、小説であり、劇であるとしても、何れも人生否生活其物と、血と肉との親密な關係にあるものとして之に趣くのである。頭が重くなるを意に介しない。考へさせられるのを苦痛としない。宗教に行いて得ず、道徳に聽

いて満たざるところを求め、眞剣な態度でかゝるのである。人によつては此態度を以て文學の過重視であるとし、又人によつては文學は人生問題の解決上、他の何物も供給し得ざる關鍵を與ふるものであるとして、文學の特質中の或一つを法外に持上げやうとする。而して其是非は暫く措くとしても、かくの如き態度を以て文學に趣くとするならば、之は正しく我充實生活の期するところである。文藝の極致は何であるかに拘はらず、こゝろした生活は決して空虚なものでないことは明かである。

我等は此機會に於て、充實生活を以て直ちに精神修養と解するを避けた理由を述べて置きたいと思ふ。何となれば、充實生活といふ意味は、宗教により又は道德によつて、安心立命のよりどころ據

を得ることが唯一の目的ではないからである。従つて何宗の遵奉、何主義の研究を生涯の事業とするといふことを勸説するものではない。極平たくいへば、怠け勝ちな時間に、人間生活を豊富にし有効にする糧を頭に與へよといふのである。特に宗教道德と改まるに及ばず、又文藝といふやうに碎けるも、必須條件ではない。要は畑の物も、山の物も、將た海の物も、我等の生命を持続するといふ目的の下に、とつて食膳に上ぼせると同じ意味である。

我等はこの態度を以て、從來餘分の時間と思はるゝものに對してとり來つた傳説的手段をとらず、又宗教道德文藝といふが如き紋切形の範圍に踰踏せず、大に革新と擴張とを計つて見た

いと思ふ。

何ぞや！曰く科學的知識の獲得即ち是である。但し之を以て物質文明乃至科學萬能の唾棄すべき影響など、駭け出しの文士のやうによくも聞かずにむきになつてはいけない。若し物質文明を以て眞に呪ふべきものとするならば、我等は一しきり流行したきまり文句を、何の見さかもなく使ふのよりも、もつと徹底した意味に於て使ひたい。又科學的知識の鼓吹に勉めるとするならば、單に唯物論者のお先棒に使はれる意味を以てはなくしたいと思ふ。彼を抑へ此を揚ぐるも要は我等の完全なる生活といふことが根本である。取捨撰擇凡て此標準に照らしてするのである。

今日の我等は何といつても科學的知識の後援によるのでなくては、殆んど事務を執り兼ねるやうになつて居る。のみならず第一事務の執り方其物が、科學の形式である系統と分類とによつて行つて居る。又日常の取引に於て、判取に印を捺す位ならば小僧さんにも出来るのであるが、複雑な緻密な點に這入ると、是はどうあつても學問の力に待たなくてはならぬと思はせられることが屢々ある。假りに商品販賣の店員にしてからが、昔のやうに黙つて買ふお客のみならば、値段の押問答が巧者なれば用の足りるものゝ、今日のお客は三四歳の子のやうに非常に質問好きである。價格の高下は勿論であるが、品質製法、何故だからかうと納得しなければ承知しない。言ふ迄もなく學問の進

歩普及の結果であつて、頭が一般に進んだのである。趣味を以て撰擇の標準としないではないが、今日の生活を最も利便にするものが採用せらるゝのである。

又製造工業の會社に在る社員であるとする、其販賣に當るものは必用上其商品の一般的知識を有すべきは申すまでもないが、さうでないとしても一應の知識は備へ置くべきである。殊に商工業が世界的に連關し影響する今日に在つては、最新の知識、最新の方法を採用して、之を製造と販賣とに應用するのになかつたならば、競争の烈しい世の中、事業其物の存在が危険となるのである。人はよく商機を以て普通の知識と計算との外に置き、さも天來の秘密であるかの如く見做すものがあるが、

之は誤解である。一見神算鬼籌と思はるゝものも、其實進歩せる學問と綿密なる計算との貢献に外ならないのである。此點にかけては、官公省の勤め人であるお役人様は、會社商店の勤め人である町人共より、遙かに後れて居るかに思はれる。日々の事務の性質より來る相異ではあるが、生活の利便より見て非常に損なことである。日常生活に直接の關係なき縁遠いことゝ見えても、存外に密接な事柄が澤山にある。

試みに夜分の二時間に何をしやうかと思案に耽るとき、眼前にぶら下る燈火を、一體何物かと尋究する者が我等勤め人の内に幾人あらうか！

「解つてるよ、電氣ぢやないか。捻ねりさへすれば出て來

るんだ。」

夫に相違なし、捻ねりさへすれば出て來るのであるが、これにては職工や工夫の口吻である。堂々たる勤め人としては更に一段の懸隔なくては身分の手前申譯があるまい。

「陰陽電氣の作用から起る熱が発光するんぢやないか、そんなことは中學でもう疾うに學んで居るよ。馬鹿にしちやいけない。」

悪氣で聞くのではない。腹を立て、はならぬ。且つ夫程に解つて居るのならば、此電氣はどこから來る、市内で發生するのか、田舎から送るのか、従つて火力か水力か、事の序に説明してはどうであらう。

我等は同僚の或者が其尋問に窘窮して、電燈の前に顔を赤くするのを快とするものでは無い。只この憤慨を好奇心と化し、東京市の電燈であるならば、鬼怒川の水流を利用して、發電装置を施し、以て市内に送電するものであること、更に一歩進んでは、其發電装置の第一として、川流に堰堤を築きて水を取入れ、之を急勾配より流下せしめて落差を起し、水車を置き、發電機を備へ、變壓器を通じて送電に便にし、架空の送電線によつて長距離の輸送をなし、更に需要の向きに應じ、大小の變壓器を通じ、或は燈火となり、或は米屋に米を精げ、或は機械工場に鐵槌を捲き上げ、又は炎くが如き極暑中の執務に、不斷の涼風を送る。皆これ今日の進歩せる電氣學が、深山幽谷の

谿水に與へたる科學的洗禮であることを究めて貰ひたいのである。

今日の實業家中の或者は、此見地からすると流石に見識があると思ふ。彼等は政黨者流が此頃に眞似を始めた以前から、持合せの金に明かして新知識の吸収に努めて居る。殊に海外からの新歸朝者であるとする、官吏であつても庶人であつても、彼等は禮を厚うして招待する。ご馳走を食べさせ乍ら新説に耳を傾ける。夫も金儲けの爲めであるといつてしまへばそれ迄であるが、常に最新の知識を最先きに得やうとする努力は買つてやらねばならぬ。

「金があるから重役顔をするのサ、頭にかけては何といつ

ても我々だよ。」

學校出の少壯連は、先づ斯ういつて大に昂然たることがあるが、日に新なたる今日の學問界を眼前に控えて、只高くばかりとまり、古いのは書架へつんどくし、新しいのには手も觸れぬとあつては、自慢の頭も硬化してしまふではあるまいか。専門の學者たれと言ふのではなく、之を常識の涵養としても重要な意味があると思ふ。況んや我等充實生活の爲めの勉強である。他人の爲めでなく自己の爲めである。最初の二時間、どうぞ良い撰擇をして、縁喜のよい出立スモートをして貰ひたいものである。

十 事務室外の世界

電車と筍——窓外の天地——因果律——戦亂と船成金——
 ——擴大せる頭と心情——只是れ生の充實——

我等は上半期の賞與を當込んで、同僚數氏と郊外に遊んだことがある。而して都人士を迎へるのにくだらなきものに名物の虚名を冠らせて、羊頭狗肉策を弄するのは所謂大東京附近の常套手段であつて、此内に秋は栗飯、春は筍飯といふ目黒名物なるものがある。權八と小紫のロマンスを路傍の小祠に偲び、其芳魂を弔ふもよく、又不動尊に賽して片時も早く重役になるやうと祈願をかくるもよからう。賛成！出掛けやうと、仕立おろ

しの春衣に輕装して押出し、豫定の如く大に筍飯を食つて歸つたのであつた。然るに之を五年後の今年、其季節のある日、

「筍が大變高くなりました」

と妻君はいふ。「何故」といふことを不可缺會話の形式として居る我等は、敢て自ら「何故」と切り出さなくとも、妻君はよく了解のみこんで居る。そして、

「電車が通じたからださうでムいます。」
 とつけ足した。

電車と筍！世にも不思議な對立ではないか。電車が筍藪に脱線でもしたといふのか？否電車は大崎の終點ぎりであつて、橋を越えては延びて居ない。どこをどうして電車が筍にかゝり合

になつたものであらう。聰明なる我等のある者はフーンと微笑を洩して、

「解つてるよ。」

とほのめかすかも知れない。けれども不聰明なる我等は、更に「何故」を連發して、次の説明まで妻君を追窮したのである。

「電車が通じた爲めに市内の勤め人が皆郊外を望んで移つて来る。従つて貸家を建てる爲めに畑といはず藪といはず皆宅地になる。貸地料は年々の筈の収益より遙かに割がよい。藪は追々に切り開かれて新しい家が建つ、筈は品不足になる、高くなる。」

といふのである。成程！我等は思はず長太息を洩した。形狀か

らいつても職分からいつても、又本來の性質からいつても、何としても關係かゝりあひのありさうにも無い電車と筈とが、めぐり巡つて因となり果となるの不思議に驚いたのである。實に月收生活の豫算案に影響あるが爲めのみではない。

さて従來事務室といふ天地を萬事として居つた我等が、斯く電車と筈とに思ひも寄らず嚇おびやかされたのは、恰も突然だんぱんに背中をどやされたも同然であつた。此以來我等の頭は、自ら事務室外に走つた。デスクに向ふ勤め人であつても、街頭の人をも馬をも車をも眺めた。而して人は人、馬は馬、車は車であり乍ら「電車と筈」を思ふ毎に、そこに思ひ設けぬ因果の關係があるのではないかと疑がふのであつた。

のみならず一旦事務室より窓外に轉じたる我等の眼は、最早甲は甲、乙は乙として見ることが出来なくなつた。皮相をわつて真相を探らうとした。最も無關係のものにも、最も緊密の關係があるので無いかと、好奇の眼をみはるのである。

夏期の幾週間の休暇は、我等の生活中楽しいものゝ一つである。尤も賞與に影響するを恐れて暑い〜と出勤するものもある——是は勤め人の罪ではない。斯うさせる會社銀行の制度の不備である——が多くは海に山に吸はるゝが如く飛んで行くのである。

試みに海岸に立つ。洋々の大海原は焼くが如き日光を浴びて居る。天と地と懸隔はあつても、熱塊と冷水とは相交はること

なくして終はることはない。濛々と起つ水蒸氣の落着く先きは知る由もないが、やがて雲となり雨となり、又もとの海に還つて来る。因は果を生み、果は又もとの因に歸してしまふ。昨日もさうであつた。今日もさうである。明日も亦さうであらう。

試に山に登る。十圍の杉樹は亭々として蒼空を摩して居る。森々と枝を構へて晝猶暗く、山氣は氷の如く冷やかに我等の五體に徹する。谿水は其初め滴るが如くであつても、次第々々に瀧々の音をたてゝ来る。而して半里程下手に靉々の飛瀑を走らせるのを思ふ時に、我等は最初の二時間に其序幕を開いた水力電氣を考へない譯には行かない。落差幾尺、村落と都市を不夜城に化すべき電氣の發生地である。電氣と飛瀑——一年四時盡

くるなき谿流——轟々たる巨樹の森、又しても因と果との交錯を考へさせられるではないか。

然矣。窓外の自然界は如何ばかり紆餘曲折を極めても、所詮はこの因果律といふ一大天則の流行であり支配である。我等はその知識慾を満足せしむるに従つて、一物の微と雖も、遂に此鐵則の外に立つことの不可能なるを覺るのである。之と同時に最も疎遠なるものと雖も、切り放したる如く全く無縁のもの、存在せざることを靦面に承知させられるのである。彼の「林檎の落つる音」といひ、「たぎり立つ湯氣」といふ。何れも限りなき因果の環の内の一連鎖を、知識界の寵兒がゆくりなく取押へたのであつて、我等を包む大自然は更に——無盡の秘密を藏して居るのである。

翻つて之を人事界に見る。

人は現下の戦亂の發端に、或は突發或は勃發の形容詞を冠した。何れも我等の印象を表はしたものであつて、其間何程の複雑なる原因が之を醸成したに拘はらず、一青年セルビアンが試みた搏浪沙の一撃が、遂に今日の大戦亂と發展し行つたのは、まことに夢のやうな現實である。之が爲めに何れの關係國も、上は元首より下は一平民に至るまで皆この大事を念とするに至りたること、砲烟彈雨に幾百萬の生命を滅茶滅茶にすること、寡婦が出來、孤兒が生じ、潜航艇が暴れ廻つて海洋上の大城砦をヅブ／＼と沈ませること、洋の東西の誰彼が忙しげに右往左

往すること、羅馬法王が平和の祈禱を捧ぐる傍ら、ウイルソン大統領が口の戦ひに忙殺される等のことは、戦争が直接に生んだ結果であつて、どんな素人眼にも見當のつくことである。ちつとも不思議はないのである。

遠く離れた我國も交戦國の一である以上、戦争の眞似事ツきりて静まりかへる譯には行かぬ。商工業上の平和戦が格別の劇烈さを以て開始される。中に在つて最も目覺しいのは船腹不足より起つた海運界の活躍である。備船料も騰貴し、船賃も騰貴し、足元を見てのフンダクリに所謂船成金が續々と輩出する。誰人が定めたかは知らぬが、在來民間の有力なる實業家といふものゝ壘を摩して來る。總理大臣官邸の午餐會にも出席して、

もう仲間入りかと古參連を驚かし、ご當人は得意の鼻をうごめかすといふ一場が實演される。

戦争勃發の當時天下の識者先覺者は、大に其腦髓を絞つて、將來談を試みた。そして何れも見て來たやうな講釋をしたものである。けれども誰一人として日本の某市に船成金が勃發して、總理大臣の午餐會に招待されるといふことを豫言したものはない。通じたる電車に乗つて居乍ら、目黒の筍の騰貴するに少しも氣付かなかつた我等と全く同一である。而して途中の因果關係を抜きにして、最初の因と最後の果とを摘出し、前者を後者に直接せしめるのを世に春秋の筆法と稱へて居るが、茲にも之を眞似るならば、我國の船成金をして官邸の入口にまごま

ごさせたものは、實に若き塞耳比亞人のピストルであるといはなければならぬ。彼等にして招待會の主人公にお禮を述べらば、先以てピストルに對し滿腔の謝意を表すべきである。

我が河村瑞軒は、複雑なこの因果の理法を極めて簡潔に領解して居つた。彼は江戸の大火を消止めやうとはせず、直ちに木曾に登山をした。そして材木の買占めを行つた。又紀の國屋文左衛門は、少し蠻カラではあつたが、前者に譲らず威勢のよい領解者であつた。即彼は怒濤を蹴破つて蜜柑箱を江戸に持込んだのである。人は之を以て及び難き機智といふ。併し機智とは抑々何物であるか？外でもない因果の關係を最も明瞭に最も徹底的に看取することである。衆愚の猜々ざんくの中に在つてチャンと

見透しをつけることである。或は奇矯と呼ばれ或は突飛と嘲けらるゝことはあつても、此因彼果を錯綜せる人事中に發見して、直ちに自家藥籠中のものとなすは、我等の最も快となすもの、一つである。

さて科學の對象とする自然界、並に人事界に因果律の流行を見、漸く事務室外の天地に翼をのばしかけた我等は、も少し之を繼續しなくてはならない。

世に盜賊といふものがある。濱の眞砂は盡きてもこの種の盡きることはあるまいと、斯道の親分が喝破した通り、世間の進歩につれて彼等も亦進歩して來る。いか程監獄に容れても出て來る。我等勤め人と雖も元より油斷はならず、彼等の襲來は甚

だ以て迷惑である。兩戸にはウンと釘をささなくてはならぬ。盗難保険が此頃に出來ても、其はとられた時の準備であつて、とられることはとられるのである。どうしても豫防のできぬこと、誰しも定めてかゝるのである。彼等さへ世に跋扈せぬならば、戸は開けツ放しに寝たといふ昔にかへれるものといまくしくもなる。が何といつても盗賊は殖える。罹災者は殖える。監獄が殖える。只是れ殖える一方である。

併しこの憎まれ者である盗賊は、只憎まれる一方であつて、他に何等の思ひ直した見方がないものであらうか？他人の所有物に手を着けるのは誠に悪い。之には議論の餘地がない。けれども一步立ち入つて、彼等は何故にこの悪事を働くに至つたか

と尋ねて見てはどうであらう。若し同じく生きなければならぬ彼にして、家に擔石の貯へなく、それと知り乍ら盗みをしたといふのならば、彼を驅つて此に至らしめたのは貧窮である。又彼の交遊するところ悉く如何はしい者のみであるといふならば、境遇の影響も亦見逃し難い。又彼が相應に衣食するに拘はらず、この罪惡に向ふといふならば彼は先天に之を亨け來つたのである。所謂遺傳的に盜癖があるのだと見ることも出来る。又金品を盗んで之を自家の用に供するのではなく、只危険を犯し、他人の虚に乗ずるに一種の快感を貪るといふならば、彼の心理は正に病的である。一物と雖も盗まれては腹も立ち、差支へも起るが、依て來る因由を尋ねて見ると、一圖に罵るわけに

も行かない。遺傳と境遇の眞理を科學的に説明せらるゝ我等は、吾れ知らず攻撃の鋒が鈍ぶる。法律と道德とにあて嵌めて、峻嚴酷烈な判断を下すと同時に、同情の眼を以て眺めない譯には行かない。貧窮より免れ、境遇より脱し、遺傳もなく病癖もなかつたならば、彼も亦眞人間として我等の尊敬を博するに相異なる。詩聖ゲーテはいつた。

「他人の犯罪を聞く毎に、自分にも犯し兼ねない事だと思はぬことは無い。」

或は淪落の男といひ女といふ。彼等も亦この見方を以てせらるべき人々ではあるまいか。

但しこれを以て盜賊を看過せよ、優待せよと誤り解してはい

けない。最も煩うるさく最も憎むべきものゝ内にも、猶涙を以て見るべき一面の存することを説いたまでゝある。

さても窓外の天地——自然界といはず人事界といはず——は雜然たるうちに統一あり、個別たる中に連絡あり、相率ゐて一大原則——是に用ゐたる因果律のみの意味にはあらず——の支配を受け、而かも各自の面目を遂げんとしつゝあるものたるを知つた我等は、知識の擴大と共に同情の擴大を経験したのである。當に其豊富となりたる頭と、涙を味ひたる心情とを抱いて、我等は再び事務室内の人となるべきである。

而して此頭此心情を以て、自己と周圍とを眺める我等は、猶己が執務用の知識のみを以て足れりとなすであらうか？上役は

いつも劍突を食はせ、意地の悪いものとなすであらうか？同僚の某々氏等が事務の不成績なるを、只愚圖とのみ見るであらうか？兎も角も自己の地位を保持し得らるゝは、己れ一個の所爲とのみ見る従來の見方を固持するであらうか？

重役と雖も彼も亦人の子である。只樽を拾はない迄である。事務員を極度に働かして大に儲けやうとばかり考へるものもあるまい。一切の批評と不平とに眼を閉ぢて、一肌脱いてやうといふ感が果して起らないだらうか？日中の勤務八時間に對する事務を、さも柵か衡ではかるやうに、一分一厘も餘分にはやらぬと頑張るであらうか？記帳は記帳、計算は計算、いか程事務がたて込んで、此方の知つたこつちや無いとすまし込む

であらうか？事務室内の人も物も、曾ては皆無關係とのみ見えただのではあるが、今は自己に關係の無い物は一として存しないと思はれないだらうか？實に革命にも均しい一大變化である。かうなつて來ると、割引電車と宿傳との相違は最早問題ではない。長官と下級官吏と、支配人と書記との懸隔も亦問題ではない。我等は只自然に生き人生に交はる一員として、如何に其生を充實せしむべきかを念とすべきである。

十一 勤め人の社會的地位

— 教育ある階 — 級生活の程度 — 中流の下、下流の上 —
 — 社會の健康 — 優良なる勤め人 — 資本家と労働者 —

我等はこれまで我等自身を中心として考へ、之を周圍に及ぼしたのであつたが、今は之を逆にして周圍より我等を眺めて見ようであらう。即社會の一員としての我等は如何なる地位に在るものであるかといふことである。

從來我等が用ゐ來つた勤め人といふ言葉を、今更らしく改めて考へるではないが、之を廣い意味に使へば日收、週收、月收、年收に生くる事務員其他の勤務者であつて、官吏、銀行會社員、

商店員、軍人、學校教師、又は單に事務員と稱するもの等一切を網羅することゝなるのである。而して我等は何故に事務員の名を總稱とせずして、稍々時代後れの觀がある「勤め人」を用ゐたかといふと、之を假りに事務員と呼ぶとすると、單に簿冊の間^に在つて機械的の事にのみ當り、經營、支配、統率の義を缺くからである。それならば勤め人といふ言葉が、前者の不足を補ひ、所要の意味にシツクリ合して居るかといふと、必ずしもさうではないが、一定の時間、一定の收入の爲めに勤務する者といふ意味に當はまる平民的の言葉である。其收入の多寡に千差あり、其地位の高下に萬別はあるが、一列に見れば皆是れ勤め人である。